

をします。字が書けません。處から苦し紛れに繪で帳面を記して居ります。牛「アハ、繪で帳面を記けるといふ面白人があるものだ併し其は結構だつた、マアお勤なさい」馬「有難うございませ……武藏屋さん此處の家でございませ」牛「オウ却々小粋な家だな」馬「どうも恐れ入ります」ガラ〜ガラ〜 馬「オウ婆さん今歸つて来た」婆「イヤ旦那お歸んなさいまし」と雇ひ婆さん、出迎ひに出る 馬「アノ此方はな、私が年來お心安くして居る旦那だ、御挨拶をして呉んな」婆「オヤさうでございませるか、貴所入つしやいませ」牛「イヤモウ、此方の旦那には、却つて私の方がお世話になりました」婆「サア貴所此方へ入つしやいませ」馬「オウ婆さん、御苦勞だがお酒を取つて来て呉んねえ、其からお刺身が宜からう」婆「畏まりました」聽て誂へ物が来る、一杯飲みながら二人が差向ひ 馬「誠にどうも濟みませんでした、ちやア之を差上りますから十兩」牛「ハイ有難う、確かに頂きました」馬「エー別に之はお利息として……」牛「オイ〜、冗談云つちやア往けねえ、金を貸して高利を取る金貸ちやアあるめえし利息なんぞが要ものかな……オウお婆さん、之は僅かだが小遣ひに取つて呉んねえ」馬「マア、武藏屏さん然んな事をしねえでも宜いに」牛「ナニ少しばかりだ」婆「どうも貴所有難う存じます」牛「禮などを云はれちやア却つて此方が體裁が悪い……マア馬さん結構だつたね」牛「どうも有難う存じます、貴所にも種々御苦勞を掛けました、どうやら眞人間になれさうでございませ」牛「ダガ不思議だね、人間といふものは金が出来ると、斯うも穩やかなるものかと思つて、感心をしまつた、何か其の鶴島屋さんといふの

は、此間代替りになつたさうだが大層評判の宜い家だね」馬「エ有難い事に誠に評判が宜しうございませ」牛「どうだらう馬五郎さん、此の呉服屋といふ稼業は、下らねえ家を十軒華客になるより、女郎屋を一軒持て居る方が何んなに宜いか知れない、俺も吉原に近え田町に居て能く知つて居るが、襦袢や部屋着のやうな物を持って行くが俺を一ツ鶴島屋さんへ世話をしてお呉んなさらねえか」馬「エー宜うございませとも、旦那は能く分る人でございませから、私から話をすりやア厭だといふ氣遣ひはございませせん」牛「さうかい、ちやア何分馬さん頼むよ」馬「宜うございませとも」牛「だが馬さん世間の噂さで聞いて見ると、鶴島屋の旦那といふのは何だつてえちやアねえか」元お武家様だつて話を聞いたが、お武士さんの上りかえ」馬「へお武家さんでございませ」牛「フーム、何てえ名前だえ」馬「鶴島屋金左衛門といふので」牛「ナニ其ア今の名前ちやアねえか」馬「さうで」牛「俺の聞くなアさうちやアねえ、お武家時代に何と云つたんだ何處の御藩中だつたんだ」馬「ナニお前さん、元を正しやアお旗本で」牛「ア、旗本、其アどうも御身分なものだ、だが世の中は可笑なものだ、天下の直參のお旗本が女郎屋の亭主なんになるんだからな」馬「眞正でございませねえ」牛「で名前は何てんだ」馬「名前は立……」牛「エ、ツ」馬「立山金……傳……左衛門と云つた方ださうでございませ」牛「アーン、立山傳左衛門、ア、さうか、立山傳左衛門、眞實さうか」馬「嘘を吐いたつて仕様がねえちやアありませんか」牛「アハ、其もさうだな」其所へ婆さんが銚子を持って来る 牛「オ、どうだらう馬さん、お婆さんを一寸使にやつて呉れめえか」馬「エ、宜し

うございますとも、どうかお使いなすつて下さいまし」牛「さうか其は有難え、包みの中から紙を取出し、腰に挟んだ墨汁を取て、サラ／＼と何か認めて武藏屋半次が、半「誠にお婆さん濟みませんがねえ」婆「ハイ」牛「伊皿子臺町の自身番屋へ行って、錦屋徳兵衛さんといふ小道具屋がありますかと聞くと直ぐ知れますから、此の手紙を持って行って、返事を聞いて来て下さい」婆「畏こまりました」牛「之れは僅かばかりだが、お使い賃に貴所へ」婆「へエどういたしまして、先程澤山に頂戴をいたしまして、其上之では……」牛「其は其で之は之だ、マア宜から取とつてお呉れ」婆「旦那様どういたしまして」馬「さうよなア、然んなに一々頂いちやア濟ねえが、一度出した物は二度と引込まさない武藏屋さんの氣性、折角だから頂いて置くが宜い」婆「左様でございますか、どうも澤山に有難う存じます、其では行って参ります」と雇ひ婆さんは大きに喜んで、イソ／＼と出て参りました、跡とは馬五郎と半次が差向ひ、牛「オウ、馬さん」馬「へエ」牛「俺が黙まつて聞いてりやア汝嘘を吐きやアがつたな」馬「エツ、貴所堅氣な方にも似合はない、恐ろしい亂暴な口の利き方で」牛「何を云やがるんだ笹棒めえ、堅氣の商人は斯ういふ口を利いちやアならねえといふ掟でもあるか、コレ能く聞けよ、汝達に欺されるほど武藏屋半次は老練はしねえぞ、徳川様のお旗本で立山傳左衛門だなんて嘘を吐きやアがれ、何にも心得のねえ女子供なら知らねえこと、江戸市中を跨に掛けて歩いて居る、糺服の此の武藏屋半次、斯ういふ旗本が何所にある位えの事は知つてるんだ、何所に然んな立山傳左衛門なんてえ旗本があるものかい、其ア立花金五郎といふ男だ

らう、親父といふなア小石川三百坂下で千二百石頂いて居たお旗本で、立花金左衛門といふもんだらう」馬「エツ、どうして貴所其を御存じで」牛「知らねえで何としよう、其奴は元俺の弟分だ」馬「エツ、シテ見るとお前さんも其の言葉の様子ちやア、只の糺服ちやアありませんね」牛「今更然んな事をいふなア、汝も餘ッ程野暮ちやアねえか」武藏屋半次はせ、ラ笑つて、牛「オイ馬、汝またどうして那の野郎とさういふ事になつたんだ、汝なんざア高の知れた博奕打、爲した罪を數へた所で、博奕兇狀に喧嘩兇狀、精々友達の頭を打毀した位えのもんだらう、長くあんな野郎の手先を働いてゐると、汝の首も長持はねえぞ」馬「へエ」牛「那ア汝大變な悪黨だ、那れはな俺の弟分で、散々悪事を働いた奴だ」馬「さういふお前さんは何ですえ」牛「己の口からいふのも面目ねえ話だが、今ちやア堅氣の糺服、武藏屋半次で濟して居るが、實は俺はお旦那半次といふ盗人だ」馬「エツ」牛「俺の弟分に立花金五郎、祐天吉松といふ二人があつたが、仔細あつて吉松といふ男は足を洗つて堅氣になつた所、善に返つた其の徳で、百萬石の加賀様のお出入町人頭、本郷二丁目に居て加賀屋といふ大層な財産家の娘に見染られ、養子になつて七松といふ子供まで出来た、ア、結構な話だ、何といふ嬉しい事だらうと、實は俺は陰ながら喜んで居た、其の甲斐もなさけねえ那の金五郎の野郎が屢々吉松の所へ無心に行き、其の上加賀屋へ火を放つて、家中を撫切りにしたが折宜く吉松と其の女房と子供七松は傍へ泊りに行つたので、三人だけは命を助つたが、マア氣の毒に加賀屋の旦那を初め居合した奉公人を屠殺しにしやアがつて本郷二丁目三

丁目、那の界限を焼拂つたお尋ね者だ」馬「へエ、其ア概略は當人から聞きました、然ういふ委しい事は知りませんでした、段々聞きやア却々憎い奴でございませぬえ、シテ其の吉松といふ人と、内儀さんに子供はどうしました」牛「其の女房子は今浅草仲見世で美濃屋といふ小間物屋を出して居る、又祐天吉松は其の後之々云々で今ちやア越後五ヶ濱の観音寺久左衛門親分の所に厄介になつて居て、絶す敵の立花金五郎の所在を探して居る、其の立花さへ討つて了へば、俺と吉松と其の弟分の間々田無宿の健次といふ三人が、恐れながらと訴へ出てお上のお處刑を受ける心算なんだが、どうだ馬五郎、物は相談だが、汝曲つた事で錢儲けをしてえか、眞直ぐな事で錢儲けをしたが宜いか」馬「其アいふまでもございませぬ、同じ金儲けをするならば、何で悪い方へ與しませう、善い方へ附きてえのが人情ぢやアございませぬか」牛「さうか、其ちやア馬五郎、汝今から俺の味方になつて、那の野郎を呼出して、敵を討たして呉れめえか、さうして呉れりやア其の禮に、俺がお上へ訴へ出た曉きに、汝の罪を殘らず俺が引背負て行てやる、然んな事は俺の舌にあるんだ、間違つた所で三月か半年傳馬町で臭い飯を食やア、烟くとも跡は寢安き蚊遣かな、一度お所刑を受けて了やア、汝の身體が綺麗になるんだ、其の前に俺が三十兩金を遣るから、汝其を何所かへ埋て置て、お調べの濟んだ曉き、其の金を資本に堅氣になつて、何でも宜いから稼業を初めろ、其の代りにやアどうやら男を賣つた祐天吉松、間々田の健次、武藏屋半次といふ三人が汝に手を仕て禮を云ふがどうだ、汝も大概に足を洗つて堅氣になつた方が宜かアねえかと思ふ

がどうだ」馬「成程どうも恐れ入りました承知いたしました」牛「けれど何だせ若し汝が裏切りをして此の事を立花金五郎に話でもするやうな事があると、打捨つちやア置かねえから」馬「エー太丈夫でございませぬ、然んな事は決してございませぬから、どうか御安心なすつてお呉んなさいまし、敵討をするといふ其の心持に感心をして私がお助太刀をいたします」牛「さうか、其ア有難え、時に汝どういふ譯で那の立花金五郎の鶴島屋金左衛門と近附になつたんだ」馬「其は斯ういふ譯でございませぬ、私が友達と喧嘩をして、土地に居られなくなつたので仕方がなく少しの手蔓があつた所から、上野の宮様の御院代、持照院様の臺所番に住込んで居る内に、持照院様が宮様の御名代で京都へ行て歸りかけ、島田金谷の間の大井川が川止め、幾ら宮様御名代の御威勢でも大水の川は渡れねえ、據ろなしに金谷の宿の脇本陣に泊つて居る時、若の相手に出たのが那の立花金五郎、其から女房のおさと、いふのを、男扮装にして長和金彌、男でござると旨く押附て、其から金彌は持照院の寺小姓、其の親父となつて那の金五郎の金左衛門は寺侍、此奴は臭せえと眼をつけて、到頭それと見破つたから上野の袴越に待伏せして強請つて見たが、先方の方が役者が上で却つて此方が脅かされ、其から之々云々で、今ちやア金五郎が鶴島屋の主人金左衛門、此の馬五郎は通ひ番頭といふやうな事になつたんでございませぬ」牛「ウムさうか、其でスツカリ分つた、ちやア俺もモウ歸るから、伊皿子臺町へ使にやつた婆さんが歸つて來たら、宜いやうに云て呉れ」馬「エ、宜うございませぬ」牛「其ちやアお前は鶴島屋の番頭馬五郎さん、俺は何所までも田

町二丁目の耀吳服武藏屋半次、どうか又那方の方を通り掛つたら居るか居ねえか寄つて見てお呉んなさいよ」馬へエ、是非其の内に伺ひます」牛「ハイ左様なら」と武藏屋半次は其の儘立歸りました、翌日になると馬五郎の方から半次の所へ来て「馬何日でも宜い、私がどうか都合をして討たせるやうにするから、早く祐天吉松さんと間々田の健次さんといふ人の所へ手紙をやつてお呼びなさい」牛「其れは有難え」と武藏屋半次も確かに馬五郎が自分の味方になつたといふことを見抜いたから、嬉し喜んでサラ／＼と一通の書面を認めて越後五ヶ濱の観音寺久左衛門親分の所へ吉松健次の名宛にして送りしました、観音寺の親分の所で成田の清五郎事祐天吉松、船橋の七兵衛事間々田の健次の二人が之を見て「吉ア、有難え、之ちやア幾ら旅他國を搜してたつて分らねえ筈だ江戸の隣の品川で、鶴島屋金左衛門といふ女郎屋の亭主たア、能くも化やアがつたなア」健「さうよなア、知らねえ事とは言ひながら、千百里離れた此の越後界隈を探して居たなア、今更ながら馬鹿々々しい」吉「兎に角其ちやア早々歸らうぢやアねえか」健「さうしよう」ソコで四五日経つて旅の支度がスツカリ出来たから、改めて観音寺の親分の前へ出て「吉「扱親分」久「ウム」吉「どうも長らくの間御厄介になりました有難う存じます、江戸から手紙が参りましたから、見ると之で、愈よ敵の立花金五郎の所在が分りましたございませうから之から江戸へ出て、兄弟分のお旦那半次に頼み、仇討をした曉き、恐れながらと名乗て出る心算でございませう、明日出立をいたしますからどうか、親分からお身内衆御一同様へ宜しく仰しやつて下さいませし、仇討をすればお

禮状は必らず遣しますが、モウお目に掛る事は逆も出来ませぬ、是が今生のお別れでございませぬ、どうも長い間御世話下さいまして誠に有難う存じました」久「ア、さうか、マア宜かつた、仇討をすれば御處刑になるお前の身體、思へば氣の毒なもんだ、と云つて又死な、ければ折角賣つたお前の顔が汚れるからマア覺悟をして了解方が宜い」吉「左様でございませぬ、其はモウ豫ての覺悟でございませぬから、悪びれて物笑ひにならねえやうに潔よく名乗て出て御處刑を受ける心算でございませぬ」久「さうしねえお上にお手敷を掛けなけりやア幾分か罪が軽くなるといふものだ」吉「ハイ能く分りました、荒磯の貸元は今居りませぬえ」久「ウム、權藏は佐渡の相川まで用達しに行たが未だ二十日ばかり経たなけりやア歸つて來ねえ」吉「其ちやア残念ながらどうしてもお目に掛る事が出来ませぬが、どうかお歸りになつたら宜しく仰しやつてお呉んなさいませ」久「ア、宜いとも、俺からさう云つて置くから宜い」其の晩此の事を聞いた観音寺の乾兒一同から饒別だ草鞋錢だと云つて彼方此方から呉れたのを集めて見ると七八十兩になりました、吉松健次も大きに喜び、ソコで厚く禮を言ひ一同に別れを告げて、住馴れたる越後國観音寺を後にして、日に歩み夜に泊り、滞りなく江戸淺草田町二丁目の武藏屋半次の所へ乗込んで参りました、久し振で面會をして、三人は手を取合つて喜びました、ソコで半次が手紙を書いて品川山王横丁の馬五郎の所へ使ひ男に持たしてやると、翌朝早速馬五郎が駕籠を飛ばしてやつて参りました、牛「扱馬五郎どん、之が豫て話をした祐天吉松、之が弟分の間々田無宿の健次といふ者だ」馬「ア、左様でこ

「さいますか」半吉松、健次二人へエ「牛」之が其の馬五郎さんといふ親切な方だ、能く御禮を申すか宜い「吉」どうも馬五郎さんとやら、半次兄哥から委細を承はりましたが、此の度は種々有難う存じます、又此の後ともに御盡力を願ひ度う存じます「馬」エ、御丁寧な御挨拶で却つて恐れ入ります、決して御心配なさいませぬ、必と私がお手引をして敵を討てるやうにいたしますから「吉」マ何分お願ひ申します、就きましては之れは僅かばかりでございますがどうか取つといしてお呉んなさいまし」と云つて馬五郎の前へ二十五兩包みを一ツ出しました「馬」イエ、然んな事をなすつて下すつちやア困ります、私はモウ半次さんから莫大な金を頂戴いたして居るのでございますから、どうか其は元へお納めを願ひます「吉」イエさうでございます、半次兄哥は半次兄哥、之は私共二人の心持でございます、有ればモツと差上げたのでございますが、誠に少しばかりで體裁が悪うございます、どうか取つといしてお呉んなさいまし、どうせ私共は死で行く身體、幾ら持て居た所で寶の持腐れ、ホンの心持でございますから「馬」さうでございますか、どうも弱りましたなア、半次兄哥どうしませう「牛」宜いぢやアねえか、構ふものか取つときねえ、吉松だつて健次だつて、一旦出した物を引込ます譯にも往かなからう、俺はまた其ぢやア二人として少ねえと思つてる位だ、構はねえから取つときねえ「馬」さうでございますか、どうも有難う存じます「牛」マア今日は緩くりして行つて呉れ、今何か取るから」と之から酒肴を取寄せまして、四人が圓くなつて浮世話をして居りましたが「馬」イヤ、半次さん大變御馳走になつて有難う存じま

す、モウソロ、歸らないと商賣の方に障りますから「牛」ア、さうだとも、少しでも間を缺かして、又金五郎は抜目のねえ奴だから、何か悟られるやうな事でもあると可けねえから、急いで歸つた方が宜い「馬」其ぢやアお三人、何れ又其の内に來てお打合せをいたします「吉」どうか何分頼みます「ソ」で馬五郎は別れを告げ駕籠を飛ばして品川へ歸つて行く。

(第三十二席) お旦那半次郎の事、半次大家の娘を救ふ事

扱祐天吉松と立花金五郎の身の素性は申上げました、未だお旦那半次の傳記を申上げませんから、此度は半次の素性を申上げる事にいたします、従前淺草藏前通りは片側町でございましたが、多く財産家ばかり住んで居りまして、此のお藏前の中ほどに武藏屋徳兵衛といふ、入山形にトの字を附けました立派な呉服屋さんがございました、間口の八九間もございまして奉公人の三四十人も使つて居ります、其處の家のお嬢さんは年は十九で名前をお時と言ひました、夫婦の仲の一入ツ子、婿取り娘の事ゆる大事にして育てました、誠に優やかで殊に容貌も美しいから近所では飛だ評判者でございます、徳兵衛の女房をおゆみと言まして頃しも三月の月中旬徳「オイ、おゆみや、おときや」ゆみ「ハイ」徳「今日は花見日和といふのだらうね、風一ツない好いお天氣、斯ういふ日は滅多にないから、一ツ向島へ行て歸りに淺草の觀世音、早かつたら上野へでも廻るとして、一ツお花見をして來ようと思ふがどうだらう」ゆみ「ア、結構でございますねえ、私も餘り退

屈でございますから、貴所がお厭ならお暇を頂いて、おときを連れて行かうかと思つて居た處でございませう」徳「ア、さうか、厭どころではない私が先立で行く、誰か店の者を伴に連れて行かうやアないか」ゆみ「左様でございますねえ、子僧の甚吉が口軽で面白うございませうから甚吉を連れて行つしやいませう」徳「ア、さうしよう、其から能く働くから九兵衛も連れてつてやらうやアないか」ゆみ「ア、其も宜しうございませう」ソコで武藏屋徳兵衛、女房のおゆみ、娘おとき、番頭の九兵衛、子僧の甚吉、男三人、女二人、直ぐに支度をして出掛けましたがいや呉服屋さんの且那に内儀さんに娘さん、扮装の宜いことはいふまでもございませぬ、藏前を出て今は失なりましたが雷門前を右へ切れて、吾妻橋を渡り、左へ切れて向島 徳「オウ」大變な人だ、皆な氣を注けて歩かなければ往けない、娘や頭の物を、家内や帯の間へ挟んだ物を取られないやうに」九「エエ私風呂敷を持って居りますから、九兵衛がお預りをいたしましたませうか」ゆみ「イエ然んなに大した物を持って来ないから宜いよ」九「イヤ其はさうでございませぬ、何一ツ盗られても満らんものでございませうから」ゆみ「其もさうだねえ」徳「其より何だ、酔漢や何か氣を附けなければ往けない、打附かり何かすると間違ひが出来るから、中にもお武家様の酔たのは仕様がな、氣を注げる氣を注げる、何事ぞ花見る人の長刀、どうも危なくつて仕様がな、此向島には秋葉、白鬚、木母寺、梅若杯、いふ名所が澤山あるから春の遊びには誠に宜い處だ、何だ、葛西太郎は大分混で居るやうだから、歸りに淺草へ廻はつてお飯を食べて行かう、迎も上野の方へは廻れないだらう

よ」ゆみ「さうでございませぬねえ、上野へ廻はると餘まり遅くなりますから、其れちやア之れから秋葉へ行て見よう」長命寺の傍の處からダラ〜と下りて参りまして、秋葉へ行く田甫道、只今と違ひまして家などもチラホラでございませぬ、何處で飲んで参りましたか撥鬚奴の身の丈五尺五六寸もあらうといふ筋骨逞しき武士が長大小を帯挟みヨロ〜ヨロ〜と跟蹤けて参ります、徳「サア〜氣を注げなければ往けないよ、斯ういふお武家さんが一番往けないのだから、頻りに徳兵衛が皆なに注意をしながら参ります、主人の武藏屋徳兵衛が頻りに氣を注げる〜と云つて居る内に、彼の武士がヨロ〜と跟蹤けて来て突然番頭の九兵衛へ打附からうといたしましたから、ビックリ驚いて九兵衛がヒヨイと退いた、スルと其の後に折悪く娘のおときが居りましたので、おときにドーンと當つた、ヨロ〜と跟蹤きましたすが、危なく踏止まつて、とき「アレマア飛だ疎勿をいたしました、どうか御勘辨を願ひ度存じます」侍「ナニ飛だ疎勿をしたと、ハ、ア詫た處を見ると貴様の方から疎勿をいたしましたのだナ、勿論此方から突き當つた譯ではない、コレ、月に一度の汚れのある女などに突き當られては身の汚れになる、武士の體面に拘はる、サア不埒な女だ、身共が手討にいたすから左様心得ろ」とき「どうか左様仰しやいませんで、御勘辨を願ひ度う存じます」侍「ア、イヤならん、どうあつてもならん」傍から番頭の九兵衛が九「イエ、之はお嬢さんが悪いのでございませぬ、私がツイ心附きませぬものでございましたから失禮をいたしました、貴

様などは退つて居れツ」とビシーリと番頭九兵衛の横ッ面を平ッ手で一ッ殴られ、アツと云つて手で押へたが、見て居る内に半面眞赤になつて了つた、小僧はワツと泣き出す、おゆみは只オロオロして居るばかり、娘のおときは大地へ両手を仕て、恐ろしくもあり羞しくもあり顔も上げられませんが、流石は大家の主人武蔵屋徳兵衛「エーお武家様何とも申譯がございません、之は私の娘でございまして、どうか御勘辨を願ひ度存じます」侍「イヤならぬぞ、どうあつても相成らん切つて捨るから覺悟をいたせ、手討にいたさんければ我慢が出来ん」如何な勘辨をいたしません、五六間も離れて周囲を取巻た彌次馬連中「甲」ア、可哀想だな、何てえ分らねえ武士だらう宜い加減に勘辨してやれば宜いのに」スルと其田甫中に一軒家があります、人通りのある方に窓が開いて居りまして其の窓から目倉縞の着物を着て、頭は前髪立ち、誠に凜々しい顔をした十三四の男の子が頼りに此の様子を見て居りますと、其處へ来た阿母が「母」半次や、お前何を見て居るのだえ」半「阿母さんマア之々ですよ、可哀想ぢやアありませんか」母「オヤ、マアさうかい其はお氣の毒な事だけれども、お前が又然んな處で見て居て、アノお武家様の目にでも這入ると、何故然んな處で見て居るなど、云はれると大變だから、モウお止し、見てお在でない」半「ダケレども阿母さんお氣の毒だから、どうかして助けて上げたいものだねえ」母「馬鹿な事をお言でない、お前のやうな子供に何が出来るものではない、那なに伯父さん方が見て居てさへどうする事も出来無いのだからお前などにどうして助られるものではない、サア其處を閉て此方へお出な

い」半「ハイ」半次といふ子供は阿母の言葉通り素直に障子を閉めて座りましたが、何と思つたか半「アノ阿母さん」母「何だい」半「半紙を二枚ばかり下さいな」母「どうするんだえ」半「何でも宜いから下さいよ」母「サア之を持ってお出で」半「ハイ有難うございます」其の儘母親は裏手へ用があつて行て了ひました、其の間に半次といふ子が半紙をグチャグチャに揉で了ひ、鼠入らすの抽斗へ手を入れて阿母が今朝買ったばかりの大辛の七色唐辛の袋を取り出し、火鉢の灰を少し抄つて唐辛と混て了ひ、揉んだ半紙へ少し口を開けるやうに包んで之を持ってソツと家を脱出しました、彼の酔漢武士は益々聲を荒らげて「侍」エー面倒だ、打た斬て了ふから覺悟をしろ」徳「どうぞ御勘辨を」侍「イヤならん」と刀の柄へ手を掛けた時、ソツと傍へ寄つた彼の半次といふ子供が半「伯父さん」と聲を掛けた侍「何だ」と振向く途端に大辛の唐辛と灰と混て半紙へ包んだ奴を侍の顔へパツと叩き附けた旨く當ると紙がサツと開いて、目口鼻へ之が飛込んだから、イヤ驚ろくまい事か、アツプといふと其の侍が慌て、顔を摩つたから、堪らない目へ染るから目を開く事が出来ない、鼻へ入つたから嚏が出る、辛いものだからバツバツと唾をする、宛然犬が鼯の最期ッ尻を食つたやうな鹽梅、どうする事も出来ない侍「アツ、之は怪しからん、何をする」と云つたが、自分の方が餘ッ程怪しからん、ニッコリ笑つた彼の小僧「半」サア早くお逃なさい早く……」徳「大きに有難う存じます」といふと徳兵衛は手早く娘の手を取て引起し、五人の者はドン／＼急いで行て了ひました、後で彌次馬連中が大勢寄て集つて、ボカ／＼ボカ／＼打殿る、其中に一人がド

ンと脊中を突たから、泥田の中へ突のめつた、這上らうとするのを上から突落す上らうくと急つで足へ力を入れるから、ツブツと泥の中へ潜る、頭から泥だらけになつて目を開く事も口を開く事も出来ない、其の内に彌次馬連中ワーツといふと居なくなつて了つたので、漸々の事で武士は這上り、這々の體で立去つて了ひました、スルと此方は半次の阿母用を済まして歸つて来て見ると、何時の間にか悴が居ない、ハテ何處へ行たかと窓を細目に開けて向ふを見ると此の始末、其の内に飛で歸つて来て、火鉢の前へチヨコナンと座つてニヤリ／＼笑つて居る、母「お前、何を那の武士へ打附けたのだい」半「アノネ、餘まり那の人達が可哀想だから助けてやつた、阿母さんが今朝買った七色唐辛、那れへ灰を混ぜて



叩き附けてやつたんだよ」母「マアお前、大變な事をしたねえ、今日はマア過ぎた事だから仕方がないが、モウ此の後此んな事をしては往けないよ、お前と私と二人ぎりで、お前に若しもの事でもあらうものなら、其こそ私は生甲斐がないのだから」半「ハイ、私が悪うございました、モウ決して致しませんから勘辨してお呉んなさい」其の日は其の儘に済みました、一日二日と經つて三日目の事「〇エー御免下さいまし」母「ハイ何誰でございます…オヤ之は入つやいまし、何方からお出でになりました」〇「エー御免下さいまし、エ、つかん事を伺ひますが、お宅様に半次さんといふお子さんがございませうか、此の堤上の花見茶屋で聞きました」母「ハイ半次といふ悴がございしますが、何か疎勿をいたしましたか、イヤモウ悪戯でございまして仕方がございませぬ、只今お手習の先生の處へやつてございしますが何か悪戯でもいたしましたか」〇「どう仕りましてエエ實は昨日お尋ね申上げたのでございしますが、分りませんが、今日漸々お宅さんの坊ちやんだといふ事が分りましたとございします、今日から丁度三日前でございしましたが、此の堤下で醉漢の侍に掴まつて、私共の主人が飛んだ迷惑を致しまする處をお宅様の坊ちやんがお助けなすつて下さいましたさうでございします」母「ア、左様でございしました、飛んだ事をしたと悴に叱言を申しました」〇「どういたしましたして、貴所様の方には飛んでもない事でも、手前共の主人に取つては此の上もない御恩でございします」女「イエ、恩人だなど、仰しやられては恐れ入ります」〇「早速主人がお禮に伺はなければならぬのでございしますが、手前用にかまけまして伺はれませぬ處から、手前が

代りに参りましてございます、本来其の節お名前とお住居を伺つて置けば宜しうございましたが、何が扱ビツクリいたしましたものでございますから、碌々お禮も申さずに立戻りまして、跡で氣が付き、ア、飛んだ事をした、那のお子さんはどういふ姿をして居たらう、何でも斯ういふ風だつたから土地のお子に違ひない、那方へ行つて尋ねたら分らない事はあるまいといふのでやつて参り、漸々今日花見茶屋で聞いて分りましたやうな譯でございませう、申遅れましたが手前主人と申しますのは、淺草藏前の武藏屋といふ呉服屋で、主人を徳兵衛申します、當日一緒に居りましたのは、家内に娘、番頭に小僧と之だけでございますが飛んだ災難に出遇ひまして、既に斬られる處イエ假令斬らないでも背打位は食ふか或は、内済金を取られるとかする處でございましたのを、お助けを頂きまして、何とも斯とも御禮の申上げやうがございませぬ、之は誠に満らん物ではございませぬが、おほんの坊ちゃんのお普常着、お納めを願ひたう存じます、又之は貴女様がお寢衣にでもお召し下さいませし、之は裏地でございませぬ、之はホンの些細ながら糸代で……」と反物を二反に裏地を添へて、蕨熨斗を書いて水引を附けない金を五兩載けて出しました、母「ハイ有難う存じます、斯ういふ物を頂戴して宜いのやら悪いのやら、何だか分りませぬでございませぬが、誰に相談をするといふ人もございませぬ、親一人子一人、御辭退をいたすべきでございませぬが御大家様の御親切を反古にいたしても相済みませんから、有難く頂戴をいたして置きます、何れ近日お禮に上ります」〇「イエどう仕つりまして、手前の方から重ねて御禮に参ればと云つて、此方様か

らお禮など、云つてお出でになられては却つて當惑いたします、併しまた藏前邊を御通行の節はどうぞ一寸お立寄りを願ひ度う存じます粗茶一ツ差上げるでございませうから、嘸お取附けの呉服屋もございませうが、此の後どうか多少に拘はらず手前共を御最良に願ひます、手拭一本が糠袋一ツでも構ひませぬゆる、どうか御用を仰せ附けて下さいませうやうに……」流石は商人のお若い衆、お茶一杯を頂き世辭を云つて立歸りました、跡へ悴の半次が歸つて参りましたから、イツと母様は「母半次や、之々で斯ういふ結構な品を頂いたよお前働きの者だつたねえ」半「さうかい、其れは宜かつたねえ、阿母さんが一人で人仕事や澱ぎ洗濯をして働いて呉れるんだから、私だつて偶にやア何かして働かなけりやア濟まないや、阿母さん之からモツと澤山唐辛を買つてお置きよ、又金儲けをするから」母「馬鹿な事をお言ひでない、那んな事がさう度々あるものかね」と跡は大笑ひになりました、其から母親が一生懸命で貰つた反物を裁縫まして自分も着子供にも着せ、態々半次の手を曳て一日淺草藏前の武藏屋へ禮に参りました、徳兵衛は大きに喜び、奥へ通して改めて花見の時の禮を言ひました、又半次の阿母も「結構な物を頂戴いたしました誠に有難う存じました、此の通り子供にも着せ、私も着まして御覽に入れ旁々御禮に参りました」徳「イエさう御丁寧に御禮などを仰しやられては私の方で體裁が悪い、マア今日は緩くり遊んで行つて下さいよ」と種々馳走などをいたします、時に武藏屋徳兵衛か徳「さて内儀さん、失禮ながら貴所は元どういふ御身分で、今日はどういふお暮しをなすつてお在なされるのか、甚はだ立入つ

て相済みませんが、話して宜ければどうか話して頂きたいものです。母「ハイ有難う存じます、お話し申すもお差しうございませうが、私は元水戸上市の泉町といふ處で弓師をして居りました小山田但馬といふ者の家内でございます。どうやら相當に暮して居りましたが、此の子が生れて二歳の時、何やら斯やら不幸が續きまして零落をいたし、搗て加へて夫但馬は病死をいたしましたので、家財家具を賣拂ひまして、拂へるだけ借財を返し、さういふ譯ゆゑ國に居る事も出来ず據ろなく私か此の子を連れて向島の縁家を尋ねて参りまして、暫く其の人に世話になつて居りましたが、遂々其の人も死んで了ひましたから、只今は人様の濯ぎ洗濯縫仕事などをいたしまして、細々ながら其の日を送つて居りまする。母「ア、さうでございますが、親一人子一人で水入らずで宜い事もございませうが、又不自由な事がございませう、エ、失禮ながら其のお召物は、何誰がお縫ひなすつたんでございませう。母「ハイ、誠に不出来でお羞しうございませうが、私が裁縫したのでございませう。母「ヘー貴女が……オイ家内や、娘も一寸來て拜見をしる、どうだお上手なものだらう……時に内儀さんどうでございませう私共も斯うやつて呉服屋をして居りますが、お誂への仕立物何か、澤山ございませう、小僧に持せてやりますが、仕事をしては下さいますせんか。母「どういたしましたして却々呉服屋さんのお仕事などは……。母「イエ、さうでございません、之だけに出来れば結構でございませう、外の仕事をなさらんでも、私の家の仕事だけで一日だつてお手を明けさせるやうな事はございませんから、どうかなすつてお呉んなさいませんか。母

「左様でございますか、其では折角でございませうからお願い申す事にいたします。母「ア、さうしてお呉んなさい、時に半次さんは今年幾歳になりますね。母「ハイ十四でございませう。母「ハア十四、人扁に十四の心と書いて徳と讀ませるが、人の徳の定まるのは此の十四だな、どうですえ阿母さん、私共は一人や二人餘計に居た處で構はないのだが、此の半次さんを商人にする氣はありませんか、厭ならば仕方ないが、もしする氣ならば私の家へ小僧に遣してお置きなさいか、さうすれば私がお世話をして、立派な呉服屋にして上げるが、といふのは私は此の子に少し見込みがあるのだから。母「ハイ有難う存じます、何日までも親の手許へ置きましたは、本人の爲にもなりませんし、又職人は稼ぎ人が働けなくなつては仕方がございません、私は良人の仕末を見てモウ職人は懲々いたしましたから、此の子はどうか商人にしたいといふ考へで居りました、悪戯者ではございませうが、どうか旦那様御遠慮なく御叱言を仰しやつて、一人前になるやうに御面倒を見て頂き度うございませう、お言葉に甘へましてお願いをいたします。母「又當人も喜んで半阿母さんが、一人で種々働いて居るのに、私が毎日遊んで居ては誠に濟まない、何處かへ奉公に出たいと思つて居た處でございませうから、どうか旦那様お願いをいたします。母「ア、さうですか感心々々、宜うございませうとも、何より當人が然ういふ心持なら嬉しい、阿母さん安心をおしなさい、私が確かに受合つたから。母「其ではどうか何分お願い申します。爰で此の半次が武藏屋へ奉公に住込む事になりました。

(第三十三席) 半次武藏屋の丁稚となる事、並に半次金貸夫婦を殺す

事

扱半次は阿母の得心を得て藏前の武藏屋へ奉公に住込む事になりましたが、主人夫婦、番頭を初め家中の氣に入られ、半次やくと云つて可愛がられて居ります、殊に番頭は力を入れて、夜になりますと算筆の稽古、外の小僧は二度教へる處を半次には三度念を入れて教へるといふ工合、又當人も商人になるにはどうしても算筆が出来なければいけないといふ位の事は賢い子だから能く分りまして一生懸命習つて御蔭に二年も経つと一人前に使へるやうになりました、字は巧く書くし、算盤は武藏屋の家では半次の右に出る者が無いといふ位達者だ、武藏屋徳兵衛も末頼母しく思つて種々目を掛けて呉れます、其の内に年十九歳となりまして立派な若い衆、徳兵衛も番頭も正直な處を見込んだから掛取は總て半次が集めて歩く事になりました、其の年の暮の事でございます、晝の内は大分忙しかつたが、夜になつて少し片附いたので番頭が「番」オイ半次や、此二日三日忙しかつたから風呂へ行って来たらどうだ」半「ハイ有難う存じます、其では一寸行て参ります、其からお定まりの鳥目を貰つて、手拭をぶら下げて風呂へ行きましたが長湯をしては御主人に済まないといふ考へで、ザツと洗つて一ツ風呂温まり立歸つて参りました武藏屋の隣りに小林玄静といふ金貸しがあります、其處の家の前へ來ると表に人も立て居ないが、大層荒い言葉が洩

て手に取るやうに聞える表の格子の處からソツと中を覗くと、障子に映る影は小林玄静、大きな聲を出して「ま」往けません、どうあつても往けないよ」男「ではございますが、どうが一ツ其處の處を御勘辨をなすつて下さいまし、私か誠にどうも其れでは困るのでございます」玄「ならねえといふことさ、どうあつても往けないよ」男「エー御承知の通り阿母が病氣でございまして、又此の頃嬢アまで床にはひつたさき、其れからマア私が斯うやつて小兒を脊負ひまして乳貰らひに歩いて居るといふ始末でございまして、どうか年が替りますといふと早速に御返済をいたしますが、如何でございませう、御勘辨を願ひ度いものでございますが……」玄「往けないよ、往けないどうあつても駄目なんだ、待てないよ」男「ちやアどうしたら宜うございませう、私にはお返しをする事が出来ませんが」玄「お前が出来ねえからと云つて、どうしたら宜いかなんて然んな馬鹿な事があるものちやアねえ、何でも構はねえから、金が返せねえといふなら、お前の今年十一になる娘な」男「へエ」玄「那れを俺の方へ引取つて、マア吉原へ売にでも女郎にでも賣つて了ふから、那れを俺の處へ連れて來るが宜い、明日俺が迎ひに行くから」男「ダツテ貴所其ア餘まり……」玄「何が餘まりだ、豫て其の約束で證文にまでチャンと書いてあるんだ、其が厭なら直ぐに金を出せ」男「へエ、其ちやア旦那斯うしてお呉んなさい、大晦日までお待ちなすつて下さりやア、私が夜の九ツまでには必と半金持て参りますから、甚はだ恐れ入りましたが、どうか其で御勘辨を願ひ度う存じます、跡半金は正月の月中まで……」玄「冗談言ひなさんな、待てねえ、往けねえつてこ

とよ、俺が一日斯う言ひ出したからにやア、口が酔つばくなる程云つたつて駄目なんだ、冗談ちやアねえ、さう其方の勝手にばかりされては堪るものちやアねえ、往けねえつたら往けねえよ」之を表で聞いた半次が、ア、可哀想に阿母と内儀さんが病気で、自分が小兒を引脊て乳貰ひをして歩く、其の中で金を返さないからと云つて、十一になる娘を抵當に取つて吉原へ叩き賣るといふ、其ア未だ十一や十二の子供だから女郎に賣つた處で當分使ひ道になりやアしめえから、従つて金だつて碌に取れる譯はない、シラ見ると此の借りた金といふのも大したものちやアなからう、大方五兩か七兩の間違ひだらう、ア、扱々氣の毒な事だ、此んな評判の悪い小林玄静なんて金貸は世間に入りしねえ、一ツ間へ入つて口を利いて見ようかと、半御免下さいまし、御免下さい「玄」ハイ、何誰……」ガラリ障子を開けて上へ昇り、跡をビタリと閉めました「玄」オヤ、誰だと思つたらお隣の半次さんだつたね、何か御用かい」半扱旦那、突然私が昂りましたのは外ぢアございませんが私は斯うやつて隣に奉公をいたして居りますので御懇意をいたして居ります、未だ阿母が向島に一人居ります、モウ其の阿母が風を冒いたといふ事を聞いても私はビツクリいたしました、今承はりますれば此のお方の阿母さんが煩つて居られ、其の上内儀さんまでが加減が悪いといふ事、誠にどうもお氣の毒な事でございませぬ、一體之れは旦那幾らのお金の間違ひでございませぬ」半「何ね、元金は七兩なんだが、其が半年にもなるのに未だ返さねえ、尤も利息は少しばかり入れて居るから返すのは七兩二分も取りやア其で済むんだが、モウ此の人は返して

呉れるといふ目當がないから、其で此の人の娘を證文に書入れて了つて愈よ其の日限が來のに、未だ此の人が待つて呉れるといふから、モウ待つ事は出來ねえ、金貸しは金を貸して利息を取るのが商賣だから、利息も碌に拂はれねえで金を返されなかつた日にやア、錢が働らかねえから商賣にならねえ、ソコで私が斯ういふ掛合をして居るんだ」半「ア、さうでございませぬか、どうでございませう、大晦日の夜の九ツまで待つて上げちやア下さいませぬか」玄「何だ、お前さん何の話に出來たんだ、お前さんが口を利かねえからつて、本人同士で話をして居るんだから、お前さんに云はれるまでもねえ、俺が此の人に負られるものなら負てやる、餘計な事を言ひなさんな、何を云やがるんだ」半「ソコで返しめ、青二才め、未だ汝なんざア玉子の殻を尻へ附着けてるちやアねえか、縫子の癖にコツペイな、生意氣な口を利きやアがるな、汝達の間へ入つたつて何と思ふものか、サツサと出て行け、何だ人の家へ断りもなしに入つて來やアがつて」玄「へエ、どうも相濟みません、お隣づからでツイ心安いから這入りましたが、不躰な眞似をして何とも相濟みませんでございませぬ、どうか其の邊は御勘辨を願ひ度う存じます、就きましてはどうでございませう、甚はだ恐れ入りましたが、其ではモウ二日三日お待ちなすつては下さいませぬか、さういたしますれば私が御返金をいたします、ナニ十兩からは大金と云ひますが、七兩や七兩二分位ゐるの金なら、私が幾ら奉公をして居るからと云つて、三日や四日間があれば、どうにもして才覺をいたしますから、どうか四五日と思つてお待ちを願ひたいもので」半「生意氣な事をいふな、何も俺は汝が

ら貰はうといふ考へは微塵もねえ、頼まれもしねえ處へ飛出しやアがつて、何も汝なんぞが口を利くにやアば及ねえ、愚圖々々云はずにサツサと出て行け」牛「へエさうでございませうか……エー内儀さん、誠に済みませんでございませうが、貴郎からどうか旦那にお詫をなすつて、私に口を利かしてやると仰しやるやうにお言葉添へを願ひ度う存じます」女「イ、エね、良人はモウ一日言ひ出すと、どうしても其を通さぬければ承知をしない性分なんですから、私が幾ら云つた處が無駄でございませうよ、聞かないと分つてるものをいふのも下らない話だから、私は然んな事をいふのは御免を蒙りませうよ、お前さんも人の口なんぞを利くより自分の頭の蠅でも逐ひなすつたら宜いだらう、全體お前さんは随分跳つ返りだよ、生意氣だよ、愚圖々々云つて居ると私の方の掛合の邪魔になるから、サツサと歸つてお呉んなさいよ」牛「へエ左様でございませうが、其ちやアお言葉通り之でお暇を頂きます、扱貴郎私は半次といふ者でムいませうが湯の歸りに此前を通り掛り、高聲の掛合がフト耳に入り、ア、お氣の毒な事だと思つたので前後の考へもなく飛込んで口を利かうといひましたでしたが、成程私は未だ青二才でございませう、私のやうな者のいふ事は聞いてお呉んなさらないのが道理、生意氣でございました、跳つ返りでございました、自分の足りない處から飛だ耻を掻いて、意氣地なくも此儘引込みます、誠にお氣の毒様でございませう」男「ハイ誠にどうも有難う存じます、何方のお方でございませうか、未だお年もお若いのに御親切に有難う存じます、何とも御禮の申上げやうもございせん」牛「どういたしまして、人の事は人が口を利くと昔か

ら極つて居るのでございませう、殊に私だつて奉公をして居るとは言ひながら、出来ないものではない、出来るのだから一先づお立替をしやうと斯う言ひますのを、どうしても承知致しません誠にお氣の毒様でございませう、失禮ながら貴所様は何方でございませう」男「エー私は淺草の阿部川町の家主九兵衛の店を借て居ります左官の音吉といふ者でございませう」牛「ア、さうでムいませうか」音「阿母をみさ、女房をすぎ、娘をおさちと申しまして、其の十一になるおさちといふ娘を、可哀想ではございませうが、脊に腹は替られませぬ明日此處の家へ連れて来る事にいたしましたませう、どうも有難う存じました、貴所の御親切は決して忘れませぬ」牛「さう仰しやられては益々私が體裁が悪うございませう、那方の方を通りました節は、貴所のお宅へお立寄り申して、又何とか御相談申しても宜しうございませう御免下さいませ」音「有難う存じます」牛「其ちやア小林さんの旦那、御免下さいよ」玄「サツサと歸つて呉んな」牛「大きに音吉さんとやら失禮をいたしました」と半次は表へは出たが、立去りもせず、表へ立て中の様子を窺つて居ると音「エ、泣くな、泣くなよう……」玄「ちやア音さん、明日の朝俺の方から連れに行くから其の心算でな」音「へエ、ではございませうが何分阿母が煩つて居りまして、只モウ那奴の事はかり樂しみにして居るのでございませうか、貴郎がお出でになつて連れて行かれると何んなに嘆か知れませぬから、ソツと家を連出しまして、明日の夕景までには必らず連れて参りますからどうか明日の夕方までお待ちなすつてお呉んなさいませ」玄「さうか、其の位々の事なら待つてやらう、承知した、併し日の暮方までに連

れて来ねえと、打捨つちやア置かねえ、俺の方から連れに行くから其の心算で居な、サア歸んねえ〜」ボンヤリと立て、ア、泣くなく〜と脊負つて居る子の臂を叩いて、男心に歎泣きをした左官の音吉の影法師が障子に映つたのを見て、ア、氣の毒な事だと思ひながら半次は武藏屋へ歸つて参りました、半「番頭さん只今歸つて参りました」番「オウ半次や何日になく今日は大層遅かつたな」半「イエ魚屋の小僧さんが二人で湯屋の流しで喧嘩を初めまして、餘まりどうも亂暴で怪我でもしてはならないと思つて、私は風呂の中で見て居りました處が、建具屋さんの親方が口を利いて漸々納まりました」番「ア、さうだつたか其は危なかつた、今度其んな事のあつた時に行たら中へ入らずに歸つて来るやうにしないさい」半「ヘ私もある端か行た時なら歸つて来て了ふのでございまして、何分風呂の中へ入つて居りました時に流しでもつて桶の投りつこが初まりましたから、迂濶出て怪我でもしてはならないと思ひまして中へ入つた儘で居りましたが、其代り能く温たまりました」番「ア、さうかい、サア〜モウ奥は引たから、皆な終つて寝たら宜からう」OL「ハイ有難う存じます」之から半次も床へ入りましたが、どうも先刻の事が氣に掛つて眠られない、實に那の小林玄靜といふ金貸しは太え奴だ、今までに何の位の那奴の爲に酷い目に遇つて居る者があるか分らない、又何の位の恨んで居る者があるかも知れない、那の又玄靜の内儀さんも恐ろしく人を馬鹿にしやアがつて、俺を人間ちやアねえやうに吐しやアがつた、氣の毒千萬だなア那の人は、明日親子別れた、金のあるものとなないものちやア、斯うも違ふものかしらア、厭だ〜

人の事ばかりちやアねえ俺の身の上もさうだ、阿母が金を持つて居るといふ譯ちやアなく、此處の内を勤め上た所で、暖簾を分て呉れて千と二千の資本を下し、質兩替なり呉服屋なり初めさして呉れるといふ譯にも往くめえ、高が通ひ番頭支配人、此武藏屋の店を預つた處で、始終頭が支へて居て酒一杯碌々飲めねえ、ア、滿らねえ、其に附けても憎い奴は那の小林玄靜夫婦、エ、どうなるものか、寧ろその事那奴等夫婦を打殺して、大勢の貧乏人を助けてやらうかしら平常は其んな氣もなかつたが、不圖した事から世の中が不満になつて人を殺さうなど、いふ氣を起した、之も後にお旦那半次といふ大盜賊になつて、人殺しの八九人もする男、持て生れた疝癩性一種の病とでもいふのか、斯うと思ふから益々疝が高ぶつて寝られない、其の内に四邊は寂々として一同寢静まつた様子、野の音ばかり聞える、エ、やつ、けろい……ソツと起上り、足音を盗んで臺所へ来て水口の戸を音のしないやうに開けて裏口へ出ました、躑て路次の處へ来て、表の様子を暫く見て居たが、全く人通りがない、路次の屋根へ這上つて、往來中へバツと飛下りました、脇を見る石小葉がある、之れ幸ひと手頃な奴を拾つて手拭に包みました、目方四百目や五百目はある石小葉、之で殴り殺す氣と見える、其奴をクル〜と手拭に包んで懷中へ入れ、小林玄靜の内水口の處へ来ると、下女が疎勿で締りをするのを忘れたか、戸が細目に開いて居たのは、之れ小林玄靜の運の盡きた、妙な事があるものだ、ニツコリ笑つて、ミシリ〜と戸を開けて、大々度胸の半次が、暗ながら透して見るといふと、竈様の脇の所に横に棧が打てあつて、其れに菜

切庖丁だの出刃庖丁だのが二三本堅に差して
 あります、之に眼をつけた半次が、此奴倔強
 の得物と思つたから、其の出刃庖丁を取り、
 懐中から手拭を取出して、端だけを持つとコ
 ロ／＼と中の石小葉は下へ落ちた、其の手拭
 だけ懐中へ捻込んで、此の出刃なら結構だ併
 し役に立つかしらと竈様の土の處をズーツと
 突くと、サツと入つた、めた、ミシリ／＼と
 奥へ来て、唐紙を細目に開けて見るといふと、
 非道の金貸し夫婦が行燈を真中に右と左に寝
 て居る様子、手拭を出して頬被りをして、出
 刃庖丁を逆手に取直すと、ズーツと中へ入つ
 て来て、小林玄静の上へ跨がつて、突然咽喉の
 邊りをズーツと突通した、ギャツと云つて
 虚空を掴んで苦しがる、其の音に驚いて目
 を覺した女房が、「アレー」と云つて逃さう



とする奴を、汝逃してなるものかと、何時の間にか取直した出刃庖丁で、追ひ掛けながら脊筋
 をズーツと突いた、アツと云つて之れまた打倒れる、髻りを掴かんで鳩尾の邊りをズプリ突きま
 したから、其の儘に息は絶えました、玄静の様子を見ると、モウ之れも咽喉を抉られたから全く死
 んで居る其れから女中部屋の方へ来て見ると女中は蒲團を被つてブル／＼ブル／＼震へて居る、
 女中を殺して了はうかとは思つたが、眞逆に俺の面を見やアしまい、罪もない女中などを殺すの
 は可哀想だ、非道の金貸夫婦こそ殺しもしましたが、罪のない女中は殺さないといふのは、流石
 は半次でございませう、其を近頃の盜賊は、二本榎の五人殺しなどを初めとして、罪のない女中か
 ら赤兒まで屠殺しにするといふ事が流行しますが、誠に宜くない事でございませう、二間三間隔つて
 居たんだから、俺の顔を見た譯でもねえだらう、知れたら知れたまでの事だ、何か落した物はな
 いかと、四邊を見廻したが往來中で拾つた石小葉ばかり、臺處へ来て、手探りで水瓶の柄杓を取
 つてガツクリ呑んだ氷のやうだ、ホツと息を吐いて又取返しました女中部屋、態と太い聲をし
 て「女、女、出て来やがると叩ツ斬つて了ふぞ、夜の明けるまでさうして居ろ、之だけ云つとき
 やア宜んだ」斯う云つて水口をピッタリ閉てガタンと中から錠を下して了つた、女は之を聞いて
 居るから、出て来やアしない、半次は那方をガラ／＼、此方をガラ／＼開けて見て居ましたが、
 漸々目附かつた證文箱、中から證文を取出して、ズター／＼に引裂いて了ひ、行燈の障子を上へ上
 げて置いて、ヒヨイと證文へ火を放つて、逆手に持ったからバツと上へ燃上る、藥鏝を下して火

鉢の中へ入れ、火箸で押へてスツカリ灰にしてしました、ア、之で宜い……筆筒へ斯う目を附けた、筆筒の抽斗が三ツあるが、其の一番下は少し小さくつて端の方へ金物が附いて小さい抽斗が別に出来て居る、此奴へ火箸を突込んで抉り開け、其の小抽斗を引繰返して見ると、小判ばかりで金が五十七兩あつた、どうなるものかこれを持って行かう、其の五十七兩の金を懐中へ入れ悠々と行燈を持って臺所へ来て、先づ水を汲んで手先へ附いた血を洗ひ落し、顔を洗ひ、足を洗ひ、モウ血の附いて居る處はないとスツカリ見定めて、燈火をフツと吹消し、水口の戸を開けて表へ飛出し、又元の通り路次の屋根を飛越えて、武蔵屋の裏口から入つて手拭で能く足を拭いて上へ昇りましたが、出て行く時より此の時の方が何んなに心配だか分りませんが、幸ひに誰一人之を知る者もないやうでございます。

(第三十四席)

半次水戸へ行て四の宮隼人の門人になる事、並に半次遊女屋四郎兵衛を頼る事

ソコで半次はソツと自分の部屋へ歸つて来て、其の寝衣を脱いで己れの行李の一番下へズツと突込んで、外の寝衣と着替へる、モウ之で宜いと安心をすると、大膽にもグツと寝込んで了りました、サア夜が明けるといふと、隣の家では大變な騒ぎ、夜が明けるのを待兼ねて下女が表へ飛出し、町役人に訴へ出たから、町内上を下への大騒ぎになつた、何だ、何だと武蔵屋の若い

者も大勢出て見る、半次は便所へ入つて手先足先を能く見たが、全く血汐などは附いて居りませんから、之なら宜いと、自分も一緒になつて隣の家へ、何でございますかと見に行くといふ鹽梅、誰あつて此の半次がいたした事と心附く者はございません、ソコで下女を調べて見ると、女「左様でございます、私はキャツといふ聲で目が覺めました、全く旦那御夫婦が殺されたといふ事が分ると、モウ身體が竦んで終ひましたから、蒲團を被つてガタ／＼震へて居りますと、其所へ盗賊が這入つて参りました、出るな、出ると叩ツ切つちまうぞ、夜の明けるまで決して出ちやならないと言ひましたが、どうして私が出るなど云はないでも出られません、漸々夜が明けましたから飛出してお知らせ申したやうな譯でございます」といふ下女の申立て、殺害をした出舟庵丁は家の物、他には石小葉が一ツあるつきり、併し其は何の爲に持て来たものか分らない、其の外には證據となるべき物が一ツもございません、證文がズタ／＼になつて焼捨てある、金が紛失をして居る、正に之は恨みのある者に違ひない、盗賊の所業だらうといふので、長のお尋ねといふ事になりましたが、人相も分らないければ姿も分らない、尤も姿がわかれば人相もわかる譯だが、姿が分らないから人相が分らないのだらう、へ、何もこんなに繰返して詳しく云はないでもようございませぬが幾ら探したつて之ちやア分りつこはない、小林立静の家は取潰しに相成りました、サア近所では大評判、〇「どうだい、エー、那の非道の金貸しが殺された、藏前森田町の鬼の立静が殺された」と云つて、喜ぶ者があればと云つて、嘆く者は一人もございませぬ、其れから十

日ばかりも経つて半次が、淺草の阿部川町へ用達の序でに、九兵衛といふ家主の所へ尋ねて参り半「お宅のお店に左官の音吉さんといふ方がお在でございませうか」九「ア、音吉さんの家は此處を斯う行つて、斯うお出でなさい」と心持宜く教へて呉れました、其所へやつて来た半次が、半「エー御免下さいまし」子供「ハイ何誰でございます」と出て来たのは、十一二になる女の子、身には襦袢を纏ふて居るが、目鼻立の美しい子が出て参りまして、半「エ、左官の音吉さんのお宅は此方でございますか」子供「ア、阿父さんは家に居りますよ」中をヒヨイと覗いて見ると、此間身體が悪くつて寝て居ると云つた内儀さんが、病氣が癒つたものと見え、赤兒を抱いて座つて居ります、其の向ふに破れ屏風が立てあつて、ブーンと樂の匂、此の内に阿母が寝て居るものと見える、右向ふに火鉢の前へ胡座を掻いて居るのは左官の音吉、音「何誰ですえ」ヒヨイと半次の姿を見て音「オウ、之アどうも能くお出でなすつて下さいました、オイ嬢ア、此間話をした鬼の玄靜の家で口を利いてお呉んなすつたなア此のお方だ、どうも先達では誠に有難う存じました、一寸御禮に伺はう〜と思ひましたが、何をいふにも貧乏暇なものでございますから、ツイ御無沙汰を致しまして相済みません」半「イエお禮などを仰しやられては誠に體裁が悪うございます、折角中へ入りましたのに用ひられないで、誠に残念でございました」音「兎に角貴所の御親切は忘れません、那れから家へ歸つて参りまして、嬢アにも話をして喜びました」半「其はさうと人の壽命といふものは分らないものぢやアありませんか、那の晩小林玄靜が殺されて了ひましたね」音「どうも

私もお喜んだと云つちやア済みませんけれども、既に親子別れをする所を助かりました、段々聞けば證文を残らず焼いて金を持つて行つたさうでございしますが、矢ッ張何ですれえ意趣意恨のある者がした仕事に違えございせん、私も今まで何の位の利息を拂つて居るか分りません、モウ借りてから七八年になりますか、どうしても元金を返す事が出来ませんで随分那奴の爲に苦しめられました、そんな奴に金を借りたのは私が悪うございました、マア此んな所へお尋ね下さいまして有難う存じます」半「實は私も貴所にお金の少しも差上げたいと思ひましたが、ツイ暇がないので遅くなりましたが、今日丁度御近所まで用事がありませんから、お立寄をいたしました、どうか之で阿母さんに何かお好きな物でも買つて上げてお呉んなさい」と澤山出して露顯ると往けないと思つたから、二兩二分紙へ包んで出しましたから、左官の音吉夫婦は涙を流して厚く禮を述べました、ソコで別れを告げて歸つて来て、ア、好い心持だと云つて居る所へ俄に阿母が急病といふ知らせ、驚ろいて半次は取る物も取敢ず向島へ行て、看病をいたしました、無い壽命はどうにも仕方がない、引き汐時と諸共に、阿母さんは此の世を去りました、半次は悲嘆の涙に暮れましたが、今更嘆いても返らぬ繰言、思ひ諦めて向島の世帯を終ひ、僅かな品物を賣拂つて金にいたし、武藏屋へ立歸つて来て半「ア、阿母さんは豪儀でございませう、家を調べて見だら之れだけお金が貯てありました」と云つて玄靜の所から盗つて来た金を出して見せたから、ア、感心な人だと云つて賞めたけれども、誰れ一人怪やしむものもございません、其の内に半次

が武蔵屋に奉公をして居る内に、博奕を覺えたり何かして段々悪い友達が出来、其所で半次が馬鹿でない男だから考へた、之や可けねえ、假令悪い奴にしる人を二人殺して金を盗り、博奕を打つ、酒を飲む、斯う俺も身體を持崩しては駄目だ、萬ヶ一俺が上のお繩を頂くやうな事になると、長年御恩を受けた武蔵屋さんの暖簾へ瑾を附けなければならぬ、先方で愛想を盡さない内に此方から出て行かうと、體よく暇を貰ひ、懐ろに金はあるし、モウ阿母を見送つて終へば心に掛る雲も無し、何處へ行かうといふ的はないが、一つ劍術の稽古でもして、武士にでもなつて見やうか知らん、就ては俺も水戸の生れ阿母の話に水戸の家來で、まだ御年はそれほどでもないが、四ノ宮隼人といふ先生が大層評判が好く、第一世話好きだといふ、此の御方の所へ行つて奉公をしよと考へ、幸ひ水戸に自分の遠縁の者があるから、祝町和泉町といふ所へ尋ねて来て見ると、其の人はモウ三四年前に何所かへ引越して終つて其の行先も分らないといふ、ア、困つたものだ、他に便る人もない、仕方がないから先生の所へ行つて直接にお願ひ申して見よう、物は當つて碎けろだと、御城下へ来て四ノ宮先生の道場と聞くと直ぐに分つた、夫れへ參つてどうか先生へ御目通りを致したいといふと、若黨が取次ぎ、此方へ通れといつて一室へ案内をされました、初めて尋ねて上へ通される位では七分望みは叶ふと思つて待つて居る、所へ四ノ宮先生お立ち出でになつて、隼尋ねられた四ノ宮隼人は拙者だが、お前は何だ、見た事もない人だが「牛」へエ私 は江戸藏前森田町に呉服渡世を致して居ります、武蔵屋と申す家の奉公人でございましたが、

仔細あつて商人が嫌になりました「隼」成程「牛」ソコで一人阿母がございました所、其の阿母も歿になりましたに就て、改めて主人から暇を貰ひました、御承知の通り商人は金が資でございました、殊に呉服屋などは多分の資本がなくなつては却々出来る稼業ではございません、才取り位の事では儲けもなし、逆も行末に見込みがございませんに依て暇を貰ひ、どうか腕に技を覺えて身を立てようといふ考へで、先生の所へ伺ひました、どうか仲間でも折助でも決して給金などは入りませんから、御屋敷へ御使ひ下さつて御用の合間に武藝の御稽古を願ひ度う存じますが如何なものでございませうか、斯様申上たらどうも不躰な奴だ、初めて遇つて何だか分りませんが如何なもので、其れが私の遠縁の者ゆゑ、是れを尋ねて參つて、其から御城下の旦那様を御願ひ申し、順を以て御當家様へ御願ひに出るつもりでございました所、其の金兵衛と申す者は三四年前に不幸が重なり、他へ引移つて其の行た先が分らないと申す事、暫らく音信不通で居りました、故然ういふ事も知らずに參りましたが、便りに思ふ人は居ず、他に知る者もございませんから、寧ろ之は人を頼むより、物は當つて碎けろといふ譬、直接に御當家へ伺つて願つて見て、御断りになれば仕方がないが、マア無理にもお願ひ申さうと臍を固めて鐵面皮しくも突然に出ました譯でございませう、どんな辛い勤でも致しますが御使ひ下さる譯にはなりませんか「隼」ウム然うか、丁度當家でも仲間が一人欲しい所だが仲間が宜かな「牛」エー結構でございます「隼」併し受人の無い者を置

く譯には往んが、其ではな下町に上總屋茂兵衛といふ人入があるから、其上總屋へ参つて、此の趣きを話をして茂兵衛の乾兒になり、其から私の所へ仲間奉公をするがよからう」半「有難う存じます、どうぞを何分ともお願ひ申します」と半次は喜んで、一旦暇を貰つて城下へ参り、經節の折に酒の切手を買ひ、之を土産に持つて上總屋へ来て右の趣きを話をすると、上總屋が「イヤ仲間奉公などをすると、斯んな氣張つたことをしないで宜いにも、マア承知はしたが直ぐに連れて行くのも何だから、一應先生の處へ行つて、全たく使つて下さるか何うだか伺つて見よう」と茂兵衛が四の宮へ来て尋ねると、如何にも使つてやるといふ挨拶、其から改めて半次を連れて参りました、四の宮先生使つて見ると却々氣が利いて居る、猶種々人間が横着であるかないかといふ所を試して御覽になると、横着どころではない、誠に忠々しく能く働らく、ソコで若黨の神戸要助といふのが劍術を十分に先生から、稽古を受けて居りますから、此の人に就て半次は劍術の稽古を初めた、所が早いもので何日か三年ばかり経ちましたが、其間に半次はどうして神戸要助などは遠く及ばんほどの腕前になつた、先生も之は物に成るワイと思召したから、若黨は一人で宜いものを兩若黨といふ事にして半次も仲間から若黨へ直されました、半「時に半次」半「ハイ」半「貴様を若黨にして遣はしたに就ては姓がなくては往かん」半「ハイ」半「若黨で苗字のないのはないが、貴様は町方の者だに依て、苗字はあるまいが、何と附けた者だな」半「へ先生實は私は元武士の家に生れた者でございます、仔細あつて町人になつて了ひましたが、祖父の代までは今井

といつたさうでございます」半「ハア、今井」半「ハア今井徳右衛門と申したのが、私の祖父で野州木連川の浪人でございます」半「ア、然うか、其れでは今井半次郎と致したらよからう」半「へ有難う存じます」半「今改めて附けた譯でもない、其れが眞正の貴様の名前だ」半「左様でございます」ソコで若黨となつて數年の間別に御話もなく、終に免許の腕前になりました、中々六年や七年で免許の腕前になるなど、いふ人は滅多にないさうでございます、其には文字の素養もありますから、四ノ宮先生も實に末頼母しく思召して在つしやる、其の中に霜月の事或る日水戸の町を彼方此方ブラ／＼歩いて居りました、モウ此頃では御城内にも御城下にも澤山懇意の者が出て來、殊に持て居る金をバツバと使つて、他の屋敷の若黨や仲間などにも目を懸けてやつたので、今では却々良い顔になつて居ますゆゑ、往來をして居ても「〇ヤア、今井さんでございますか」△「之は今井さん何方へ……」など、挨拶をされる、然う馴染が出来て見ると面白い、上町の横手へ入つて來ると、山のやうに人が集つて居る、何だ知らんとヒヨイと覗くと、年頃五十ばかりになる白髪の爺、傍の



處に若い女が両手を仕き、其の亭主と見えて、色の眞蒼の、亂鬢長髪の三十ばかりの病みほうけた商人體の男。〇「どうも何とも恐入りますが、私が此の通り病氣でございまして、どうにも只今の處致し方がございませぬ、誠に相済みませんが、來月の十五日まで御待ちを願ひます、其れまでは鹿島の縁家から金を送つて呉れる事になつて居りますから、どうか來月中旬まで御待ちなすつて下さいませし」爺「往けねえ、何うしたつて往けねえ、何でも宜いから今日は此の内儀さんのおやすさんを連れて行くから然う思つて貰はう、僞病を使つたり、空涙を溢したつて、其の手を喰ふやうな乃公ちやアねえ、どうしても内儀さんを連れて行く」之を見ると今井半次郎、半「ア、酷い奴だ、何といふ情ねえ金貸だらう……、御免なさい」と人を押分け、入つて参りまして半「ア、モシ、御病人、貴郎は何所の御方でございます」爺「何だ、汝は、今人が掛合ひ半に口を聞やアがつて何だ侍だか伊勢の御師だか知らねえが、餘計な處へ出しや張て口を利くない」半「ナニ一合取つても武家奉公をして居る者だ、天下副將軍の御膝下、夜でもあるか眞晝間病人を捉へて無理難題、剩へ人の女房を連れて行くとは無法千萬、モシお前さん何うした譯で……」〇「ハイ有難う存じます、私は小間物渡世を致して居ります佐兵衛と申す者で」半「ウム」〇「昨年此の御方から金を二十兩借りまして元利共で二十五兩になつて居ります、處が段々不仕合せが續きました其れを御返し申すことが出来ませぬ、嚴しい催促を受けまして、今月の二日までに御返し申します、若し出来なければ家内を其方の御見世で遊女になすつても差支えございませぬ

と、據ろなく證文を入れましたが、此の病ひで二日にも御金が出来ず、ソコで來月中旬には鹿島の親戚で都合をして呉れる筈でございませぬ故、其までの御猶豫を願つて居る處でございませぬ」半「ウム」やす「只今夫が申上げる通りでございまして、夫が病氣でさへなければ私が別れて遊女になつても仕方がございませぬが、私が離れましたら誰も看病する者がないゆゑ、據ろなく私も夫と共に御猶豫を願つて居るのでございませぬ、どうか御武家様、濟みませぬけれども來月中旬まで待つて呉れますやう、お話を願ひ度う存じました」半次郎も二十五兩位の金で、彼はいふも面倒臭い自分が出てやりたとは思ひましたが、當節はモウ然んなに金の持合せもないから、據ろなく對手の様子を見て居りましたが半「モシ、貴所は何方の御方でございます」爺「私かえ、私はね、此の何だ、廊の者だ」半「ハア水戸の廊」爺「ハイ廊の者でございませぬ」爺「左様でございませぬ、何と恐れ入りましたが、來月中旬まで待つてやつちやア下さいませぬか、私も共々に御願ひ申しますが……」半「往ませぬよ、今まで五度も六度も待つてやつたんだ、モウ此上は迎も駄目だ」爺「然うでございませぬか、其ちやア斯うなすつて下さいませし、改ためて私が今月の三十日まで拜借致しませう、私が借人となつて、無論利息も別に附けて三十日には必と御返し申します、私は御城内の四ノ宮準人先生の若黨を致して居ります今井半次郎と申す者、合役の神戸要助といふ者にも判を捺させますが、どうか三十日まで待つて頂きたい」爺「イヤ往けねえ、劍術使の若黨なんぞ、何程の才覺が出来来る串戯ちやアねえ、お氣の毒だが然んな事は迎も出来ませ

んよ」半「ア、然うでございませるか」爺「マア錢がなけりやア引込んでお呉れ、口を利くなら利くやうにするが宜い、金貸が貸した金を取るのは當然、利息を取るのも當然だ、利も入れず元金も入れず一年も二年も投つて置かれちやア、金貸は行き立たねえ、金が出来ねえといふなら約束通り女房を連れてくといふんだ」半「此内儀さんを連れてつて何なさる」爺「何するものか女郎にするに極つて居る、家へ連れてつて飯を食はして只ブラ〜遊んで居られちやア猶堪らねえ」半「ハアちやア初めから返さなけりやア内儀を連れてつて遊女にするといふ考へで二十兩の金を貸しなすつたか」爺「然んな考へはねえけれども、返さねえから斯ういふ事になつたんだ」半「然うでございませう、ア、斯ういふ罪の御商賣は御止しなすつたが宜しうございませう」爺「餘計な事をいはずと引込んで居なせえ」半「然うでございませるか、失禮ながらお名前は何と仰しやいます」爺「ナニ」半「お名前は何と仰しやいます」爺「乃公は祝町の立花屋四郎兵衛といふ女郎屋の主人だ」半「ア、然うでございませるかお名前だけ伺つて置けば宜しうございませう、どうも失禮致しました」爺「フ、ン、何の事だ」と鼻で笑つて「サア内儀さん行つて貰はうか」半次は頓て此方へ来て「半「イヤ小間物屋の佐兵衛さんとやら誠にどうも口を聞かした甲斐もございませぬ、私も金を持って居れば御立替を致しますが相惜今といつちやア金がありません、とんだ恥を掻いただけで、役に立たない奴と笑つて下さい、大きに失禮御免なさいまし」と其儘跡へ退つて終つた、其から此の四郎兵衛といふ爺がおやすの腕を取て引立てやうとする處へ、町會所の町役人が来て口を聞いたが、イヤ何うしても待てな

いといつかな肯かない、半次郎はグヅ〜して居たら面倒だと思ひまして其儘退て終ひ、彼方此方遊んで歩いたが、どうも氣になるから日の暮れ方又此の處へ来て聞くと、町役人が口を利いたんで、漸々來月一日までに金の都合が出来たら宜し、金が出来なけりやア愈々女房を連れて行くといふ事に極つて別れたといふ話、之を聞くと半次は腕を組んで考へて居たが、呉服屋の丁稚上りで僅か十九の時に、人の爲に口を利いて其揚句に金貸を斬殺し證文を焼いて終つて、貧乏人を助けた位の男だから、ムラノ〜として太い奴は彼の立花屋四郎兵衛といふ爺だ、金が無えから他で金を窃つても助けてやりてえが、然うしたら窃られた人に氣の毒だ、今日那れから他で聞は、アノ四郎兵衛といふ奴の家にやア満足の女郎は一人も居ねえ、皆な金を貸した抵當に女房や娘を拐帶同様に連れて來て見世へ出し、非道の眞似をして金を蓄め、又た女房のおちよといふ女も亭主に、疋を掛けたほどの悪婆ださうだ、宜し然んならば一番今夜行つて打殺して呉れようと思つて致し、城内へ歸つて「半「先生只今歸りましたどうも甚く風邪を冒きましたゆゑ、今晚は此儘お暇を頂きます」半「ア、宜いとも〜、早く寢ろ」半「有難う存じます」と寢た態をして夜更を待ち、密と屋敷を飛出して水戸の御城下へ出て、祝町を差してやつて參りました、御案内の通り、水戸の祝町といつては名代の遊廓でございまして、流石天下副將軍の御領地だけ大門の形が昔はあつたものでございませぬ、遊女屋は七軒か八軒しかございませぬが、廓内に住んで居ります者は、菓子屋蕎麥屋呉服屋に拘はらず、皆な引手茶屋の鑑札を受けて居ります、引手茶屋の鑑札を受けな

ければ祝町に住んで居られませんが、此の中で引手茶屋の鑑札のないのは岩船山巖行寺といふ御寺ばかり、尤も寺で引手茶屋などをされて堪るものおやアございませぬ、廊へ入つて立花屋四郎兵衛方へ来て見ると却々好い女郎屋だ、後前を見て顔を隠し半「何日も繁昌して結構だね」男「へエ入つしやいまし」半「ア、御厄介にならう」男「有難う存じます、どうぞお昇り下さいまし……、エ、甚だ恐入りますが、遊屋女の控でございませぬから大小はお預りを致します」半「ア、宜いとも」封印をチャンと附けまして、其れから上へ昇つた女「貴郎冠り物をお脱り遊ばせ」半「マア宜いから女を聘べ、風邪を冒して居るから暫時斯うして置いて呉れ」此の遊廊には一六、一八、本カラと斯ういふ遊びがあります、本カラといふとカラ仕舞の女を一人、抱て寝る女を一人、半次は其本カラの遊びで、酒肴を列べて少し飲んで居たが半「どうも頭痛がして往かんから、此儘少し寝かして貰ひたい」とゴロリ横になつて終つた、對手は侍、逆らつて怒らしてはならないと思ふから、其儘にして置ましたが頓て鴛母が「アノ旦那様、お召替を遊して、御床の方へお寝みなさいまし」半「イヤどうも動くも心持が悪いから斯うして置いて呉れ」と半次は其に横になつて寝た態をして居りましたが、暫らく経つて頭を上げて見ると、何時の間にか側に居た女郎も居なくなつた、外に馴染の客でもあつて行つたのか居ないを幸ひソツと起上りました頓て厠へ行つて先刻見て置いた内處の障子を開け、中の様子を見ると、又其中に唐紙が一つある、其をもサラリと開けて見ると入口の方に内儀が寝て居る、其の隣りに亭主の立花屋四郎兵衛が寝て居ります、ボンヤリ點



て居る行燈の燈火で邊りはスツカリ見える、向ふの方に箆筒があつて、其れに銃が下りて居る様子、四郎兵衛の枕許に亂れ箱がある、其處に鍵が三ツ四ツありますから、其の鍵を取上げて置いて懐へ呑んで来た白鞆の寸刀物、之をサツと引抜きまして、熟睡をして居る四郎兵衛の上へ馬乗に乗つて氣管をブツリ切つたワツといふと足を勿上やうとする奴を確かり押へて尙もブツブツと抉りましたから、バタ／＼と手先足先を振はしたまゝ息は絶えましたが、其の物音に目を覺ました女房ヒヨイと頭を擡上げる處を又乗ツかゝつて、ブツリ之も咽喉を突いた、別に大きな聲も出さずキヤツといつたまゝ女房も死んで終つたニツコリ笑つて半次郎、廊下へ出て邊りを見廻したたが誰も居ない又引返して鍵を以て箆筒の錠を外し、抽斗を抜いて中を検めると證文箱が出ました、其れから引張り出した證文を皆なズタ／＼に引裂いて行燈の火でザツと燃して終ひ、金は百も窺らないで其儘ブイと裏口から立ち出でましたが、勿論證據になるやうな履物ははいて居りません、麻裏を履いて行つたので別に印も何もないから斯んな物は構はない、サア翌日になると、非道の立花屋が斬られた、女房まで殺されて終つたといふ評判が盛んだが、誰一人可哀想の事をしたといふ者はない、皆んな宜い氣味だ／＼と云つて居ります、役人が出張して段々取調べて見ると、證文は残らず焼捨て、了つたので、女郎は皆な歸されることになり、籠から放された小鳥のやうにバラ／＼何處かへ行つて終ひました、殊に之が爲めに助かつたのは佐兵衛夫婦でございます、世間では悪い奴が殺されて結構だと、中には赤飯を蒸す者もある位でございますから、

上でも深く其の殺した本人の詮索を致しません、處が五六日経つて半次郎が其の晩着て行つた衣類を見ると血が附いて居る、此の血汐を人に知れぬやう洗つて居る處を師匠の四ノ宮隼人が見て扱はと氣が着き、家へ置いては爲にならんと思ひましたから、其となく暇を出す、其より江戸へ出て田町に獨り世帯を持ち、糶吳服となつて今の境界、随分惡事を致しましたが爲る事が上手だから旨く上の目を免れて居ります。

(第三十五席) 半次三河屋萬藏を訪ふ事、並に吉松おぬひに別れを告

げる事

扱お話は跡へ戻りまして、半次郎が馬五郎を呼びまして、金を三十兩遣つて味方に付け、牛「何れ敵討の時にはお前にも骨を折つて貰はなけりやアならねえが、兎も角も相變らず鶴島屋へ行つて居て呉れ、其の中此方は種々支度をして置くから」馬「宜しうございます」と馬五郎は歸つて終ひました、時に吉松は「吉」扱兄哥、どうか中の郷の萬藏爺さんを一ツ呼んで貰ひたいものだ「牛」ア、尤もだ、夫ぢやア俺が今日是从か行つて今夜来るやうにしてやるから、マア心配せず居るが宜い「吉」有難うございます「牛」就ちやアお前達二人は二階へ昇つて居て誰が來ても出ちやア可いねえ、家は留守のやうにして置くから「吉」エー宜うございます「二人は二階へ昇つて小さくなつて居る、半次郎は戸締りを一寸して、牛「お隣の内儀さん、一寸留守にしますからどうか御頼み申し

ます、縮りはして置きましたか……」女「ア、宜うございます、行つてお出でなさい」牛「どうかお願ひ申します」と頓て三河屋萬藏の處へやつて来た屋敷稼業の元締、威勢の宜い若い者が大勢店に居る牛「ハイ今日は」○「オヤ入つしやいまし、田町の武藏屋さんでございませうか」牛「元締は在宅でございませうか」○「へエ居ります」牛「一寸御目に掛り度うございませう」○「暫時お控へなすつて……へエ元締、田町の武藏屋さんが見えまして貴所に御目に掛りたいと云ひませう」牛「オ、半次さんが来たか、此方へお通し申せ」○「へエ……サアどうぞお昇んなすつて下さいませう」牛「御免下さい、例も御掃除が行届いて綺麗でございませうな」と二三世辭をいひながら奥へ通り牛「ハイ今日は」牛「ヤア半次さん、暫らく御無沙汰をした、何か急の用かい」牛「へエ少しお話があつて伺ひました」牛「ア、然うかい、マアお敷きなさい、お茶をお喫んなさい……さて何んな話で……」牛「済みませんが一寸どうか御人拂ひを願ひませう」其と悟つて萬「オ、皆な彼方へ行つてな」△「へエ用があつたら手を叩くから、夫までは来ちやア可かねえ」△「へエ」居合した乾兒皆な立て終つて跡は差向ひ萬「どうですえ、敵の在所でも分つたんですかい、吉松健次が歸つてくも来ましたか」牛「へエ敵の在所が分りましたとございませう」萬「然うかえ其れは有難いねえ、どうも何處に居ましたえ立花金五郎は」牛「父さん驚ろいたもんぢやアありませんか、品川の新宿で鶴島屋金左衛門といつて女郎屋の主人になつて居ます」萬「へエー成程」牛「好い女房を持ちましてね、手前から見れば半分も年の違つてる女で……」萬「へエー」牛「其れをマア餌にして金を儲けやがつたんですねえ」

萬「成程」牛「其處へ通ひ番頭になつて、天王横町に世帯を持つて居る馬五郎といふ、此奴は元牛込改代町に居て、圖々しいといつたら此の上はなからうといふんで人紳名してヅウマ〜と云ひます」萬「ウム」牛「其奴が仔細あつて私の味方になりました、其の野郎の口から分つたんで……」萬「ウム」牛「猶念の爲め二三度私も顔を隠して行つて陰覗きをして、金五郎であるかないか突留めた處が確に金五郎でございませう」萬「其は〜どうも大手柄だつた」牛「ソコで越後の觀音寺の親分の處に厄介になつて居た健次吉松の處へ手紙を遣りまして、實は一昨晩手前の處へ二人が着きましたから、早速馬五郎を呼んで遇せました」萬「ウム」牛「之からマア敵討の手續きを致しますが、其の前に一つ貴所にお目に掛つて、御別れを告げたい、今までの御禮を云ひたいといふやうな譯でございまして、今宅の二階へ二人は隠して置きました、お尋ね者がお尋ね者の敵を討つのでうつかり外へ出られませんから、どうか貴所の方から忍んで来て、遇つてやつては下さいませんか」萬「ア、行て遇つて遣る、遇つては遣るが半次さん覺悟は何うだえ」牛「サア其の覺悟は、敵討とは云ひながら、先方を殺して首を持って恐れながらと名乗つて出たら、お上様を丸潰しにするやうな者だから、腕でも足でも一本切り落して、息のある奴を三人で引脊負て御掛り様の處へ召連訴たへをして、私も今までなした罪を白状し、吉松も健次も残らず申上げて、立派に御處刑に着くといふ、之が私共三人の覺悟でございませう」萬「ウム、逃げ隠れをしやうなど、いふ、嫌な根性は半次さんありやアしめえね、若し逃隠れなんぞするやうな事があると、私が遇ひに行つたり何

かして、馬鹿にされるやうなものだから」牛「イヤ父さん斯んな事をして居て男だなど、いつちやア濟みませんが、今までの悪い事を悔悟して、此の頃は慈悲善根を専らとして、モウ悪い事は振返つても見ない位、天命を知つて居りますから、毛頭未練の心は持ちません、若し又仇討をして終つて、二人に悪びれた了簡があるならば、其の場を去らず武蔵屋の半次が二人を叩つ斬つても訴へて出ますから、親父さん御安心なすつて下さいまし」萬「ア、お前は豪い人だ、夫まで覺悟が出来て居なされば、今夜必と行てやる」牛「有難う存じます」萬「ソコで金の都合などの心配は無えかい」牛「エー金の心配は毛頭ございませぬ、私が金は持つて居りますから」萬「ア、然うか」牛「アノ二人も觀音寺の親分から大分貰つて来たやうでございませぬ」萬「其は〜どうも有難え事だ、併し二人は博奕は仕方ねえが、外に鍵の手などは旅を歩いてる中にやつたやうな事はねえかね」牛「然んな事は決してございませぬ」萬「だが半次さん、モウ然うすればお前さんもチャンと家を片付けて事をするんだらうが油一合醬油一合酒一升でも借りが残つて居るやうな事があつちやア往ねえよ、立つ鳥は跡を濁すな」牛「エー〜一文も借りなどは残して置きませぬ、明日の内に皆な拂ひをして終ひます、其となく近所の者へ遺品分の一ツもして行かうと思つてる位でございませぬ」萬「ア、其れは宜い心懸けだ」牛「兎も角も御暇を致します、どうか今夜御待ち申して居りますから……」萬「ア、四ツ少し前に行くから其の心算で一杯別れの盃をするから、大した物はなくとも二品三品肴を入れて、酒の支度をして置いてお呉れ」牛「宜しうございませぬ、別を告げて武蔵

屋の半次三河屋萬藏の店先まで送られて表へ出て、急ぎ田町へ歸つて来て、牛「お隣りの内儀さん有難うございました」女「イエ何う致しまして」牛「誰か来ましたか」女「イエ誰もお出ではありませんでしたよ、火種がなかつたら上げませう」牛「イエナニ宜うございませぬ、火は埋けて置きましたから、湯も沸て居ませう」女「ア、然うでございませぬか、締りを開けて家へ入り、バタ〜下の掃除をする、ア、歸つて来たなと二人は思ひながら態と聲も掛けない其の中に二階へ昇つて来た、吉「兄哥大きに御苦勞だつた」牛「幸ひ三河屋の父さんが居て種々話して来たがどうも父さんは豪いものだ、是々斯々いつてお前達が旅で博奕はしても盜賊をしやアしねえかと心配して居たせ」吉「ア、其ほどまでに父さんは思つて呉れるか、長らくの間苦勞をさして氣の毒であつた」牛「今夜四ツ些と前に遇ひに来るから其までに酒と肴の支度をして置くつもりだ」とソコ〜支度に掛つて居る中に、日も暮れ、四ツ近くなつた頃、溝板を軽く踏んで三河屋萬藏小さな包みを持って路次を入つて来て、萬「武蔵屋さん今晩は」牛「オヤ入つしやいませ、サアどうか御昇んなすつて……」萬「御免下さい」と萬藏が昇る半次が後の締りをする、萬「居るかい」牛「ハイ居ります、先程は失禮をしました」萬「ヤア御勿々だつた」牛「オ、降りて来ねえ」といふ聲の掛るを待つて二階から降りて来た健次吉松の兩人隅の方へピタリ座つて、吉「どうも御舅、とんだ御苦勞を掛けました」萬「何しろお前達も飛んだ災難を食つて、婆婆に居られねえ事になつたのは、番町の岩田組の一件からだ」吉「へエ」萬「就ちやア吉原のおげんだ、彼れはモウ疾くに俺が身受けをして、本所の吉田町へ一

軒家を買つて、其處へ入れて、斯ういふ譯だから未練の事をいふなと話を置いて置いた」吉「有難うございます」萬「吉の前で然んな事をいふのも訝しいが、先の女房に義理を立つて、吉原へ身を沈めた上は、再びお前と元通り夫婦になれねえ覺悟はあるらしい、縦令お前が得心で元々通りになるとした處がお前は茲で敵討をすれば御處刑になる身體、然うしたら寧ろ未練のねえやうに外に亭主を持たせやうと話しても見たが却々承知しねえ、追ては俺の娘として相應の亭主を持たせるつもりだが苦情はなからうな」吉「何で苦情がありませんやう、義理を立て呉れたおげん外ながら草場の蔭から無事を祈つてやりますから、どうか宜しくいつて下さい」萬「ウム其を聞いて安心した、健次汝にもおげんが宜しくいつた、何分頼む」健「へエ有難う存じます」萬「兎に角敵討は明日か明後日か知らねえが、斯んな物を持つて来た、是で一ぱい飲んで呉れ、首途の祝ひだ、勝つて勝栗よる昆布、敵は打鬨三種の祝ひ物、風呂敷から出しまして、四人で酒を飲み、吉「向ふ三日経たねえ中にやらかすつもりでございますから、父さん名残は盡きねえが後々を宜しく……」萬「ア、心配するな、未練のないやう立派にやれ、御處刑になつたら假令髪の毛一本でも死骸取片附の人に貰つて俺が追善供養をしてやるから、サア宜いか」吉「へエ宜しうございます」萬「ハイ左様なら」と萬藏は暇乞ひをして、路次の表まで武藏屋半次が送つて出て、歸つて来ると元の通り縮りをして「半」ア、宜い心持だつたな」吉「兄哥種々と有難う」半「サア寝ようちやアねえか、吉松何を考へてる」吉「ヤア寝られねえ、モウ仇討は明日明後日と極つたしおげんの身の上も心配はなし、

三河屋の父さんもまだ確かりして居るし、何も心残りはないねえが、悴の七松、モウ今年丁度十五になつた」半「ウム」吉「縁は切れても子に違へねえ、先の女房おぬひも淺草觀音の境内で、美濃屋といつて小間物店を出して居るといふ兄哥の話、彼處へ今夜之から行つて外ながら仇討をするといふ事を話して、悴の七松にも別を告げて来やうと思ふ、其から茲に持つて居る金、死んで行くのに金は要らねえから、置いて来てやりてえと思ふが何うだらう」半「ウム宜い處へ氣が附いた、是から行て遇つてやんねえ、健次汝だけ家に残つてろ」健「ア、宜いとも」半「ちやア吉行う」吉「ウム併し武藏屋の兄哥、おぬひが亭主を持つたとすると俺が行つちやア却つて宜くねえよ」半「イヤおぬひは大した女だ、亭主と別れたのも立花金五郎故、親父阿母をはじめ奉公人を多く殺したのも立花金五郎故、三萬兩の身代を失なしたのも立花金五郎故だ、其の敵を討つ爲に汝が心配して居るのはおぬひだつて聞いて知つて居る、殊におげんが義理を立て女郎になつて金を拵らへ送つて呉れた、夫是を考へたつて、何うしても亭主を持つやうな事はねえから安心して行きねえ」吉「然うか、其ちやア行かう」半「併し女を見て汝へんな心を起すな」吉「兄哥申戯いつちやア行かねえ、然な浮氣のこつちやアねえ」半「其も尤もだな」茲で健次が家へ残つて、半次と吉松は田町二丁目を出て眞直ぐにやつて来た馬道の通り、角を曲つて二天門を入り、觀世音の處へ来て一寸頭を下げて、仁王門へ出ると仲見世、今でこそ仲見世は夜々中通つても賑やかだが、其の昔は日が暮れたら一ツ子一人通りません豫て知つて居る美濃屋の家の表へ立つて武藏屋半次、トン／＼

ト〜「牛」美濃屋さんの御宅は此方でムい
 ますか」ぬひ「美濃屋は手前でございます」牛
 「田町の武蔵屋でございませうが、一寸お開下
 さい」ぬひ「オヤ半次さんでございませうか只今
 開けますよ」ガラリと開けるぬひ「サア貴所
 此方へ……」牛「どうも夜更け小更けに内儀さ
 ん後家で居る處へ来て済みませぬ」ぬひ「何う
 致しまして……」七「伯父さんお出でなさいま
 し」牛「ア、七松か」吉「ハイ今晚は」ヒヨイと
 顔を見ておぬいがぬい「オヤお前さんは」吉「お
 ぬひさんちやねえ加賀屋のお嬢さん何も云は
 ねえ濟なかつた」ぬひ「イエ何う致しまして、
 併しお前さんは仇討をして下さらん中は私は
 お昇んなさいとも云へない、子供にも遇はせ
 る譯に往きませぬよ」半次が間に這入て、牛
 「イヤ内儀さん敵が茲に居るといふ事は云は



ねえが、モウ二日か三日の中に必らずとも吉松に仇討をさせます、モウ敵金五郎の在所もピタ
 リ突留おいたから心配おしなさんな」ぬひ「ア、然うでございませうか、七松や、此のお方に御禮をお
 云ひ、親父さんではない、他の伯父さんだよ」七「ハイ伯父さん、有難うございませう」吉「ア、祖父
 さん祖母さんの敵は討つて上るから心配しなさんな、親に似ぬ子は鬼子といふが、お前は父親に
 似ては往かねえ、男に似るなら祖父さんに似なさいよ、武蔵屋是を……」と五十兩の金を出すの
 を半次が取次で「牛」内儀さんは博奕の金ちやアない、又曲つたことをして持て来たんちやアな
 い、越後観音寺の久左衛門といふ貸元から貰つて来た金、死んで行く身に斯んな者は入らねえ、
 持つて居れば不淨金として取上げられるから、此處へ置いて行くといふ何にも云はず取といて何
 かの足しにしてお呉んなさい」ぬひ「ア、左様でございませうか、其では後々の菩提を弔らふ御金に
 御預かりをいたします、吉さんおげんさんとも仲好くして居ますから、どうか安心して下さい、
 兎も角もお茶を一つ飲がつて行つてお呉んなさいまし」吉「イヤ其のお茶を私が飲むより、加賀屋
 七兵衛といふ、お前のお父さん、お母さん、私には舅姑をはじめ、殺された奉公人の戒名もあ
 るならば、私の志しだから、どうか其のお茶を佛壇へ上げさせてお呉んなさい」ぬひ「ハイ親父
 さん阿母さんと一緒に、殺された人達の俗名を書いてありますからどうか上げて下さいまし」吉松
 は立つて佛壇の前へ行き、南無阿彌陀佛〜と唱名を唱へ、線香を上げお茶を供へて其前へ
 平蜘蛛の如くに両手を仕て伏拜す 吉「貴所方の無念は二三日の内には必らず晴らすやうに致しま

すゆゑ、どうぞ浮んで下さいまし」と口の内で云て居りましたが、吉ア、是で宜い、兄哥大きに待遠だつた「牛」ウム吉、長居は却つて爲にならねえ、話が済んだら直ぐに行う「吉」ウム行くちやア是で御別れだ「七」ア、阿父さん「吉」エー俺を親父といつちやアいけねえ泣くなく、之までの因縁と諦めて呉れる」と口には立派にいつても其處が人情、落ちる涙は拂ひ切れません、おぬひも差俯向いて襦袢の袖を咬みめめて居る、流石の半次も横を向いた切り、吉松はかくては果てじと氣を取り直して立上ります、氣丈と云つても其處は女の事、之れが永の訣れと思へば、もつと言葉もかほしたい、いかに名残惜しいといふ様子であります、取りすがらふとする七松を引寄せて後も追はせず、涙をのんで別れの挨拶も言葉少なに立派に別れたのは半次の前もあつたらうが随分辛かつたでございませう、田町へ歸つて来て、健次に此話をする健次も「健」ア、其れでお互ひに宜い心持ちになつた」と翌朝になると馬五郎を呼びにやる、弘化三年十一月二十三日品川袖ヶ崎に於て愈々仇討本懐の條り。

(第三十六席) 馬五郎金五郎を連出す事、並に吉松仇討の事

其から馬五郎を呼びにやると早速やつて参りまして、馬「討つ討たれるは貴所方の腕でございませう、確かに私が野郎を呼出しますから、御安心なすつて下さいまし」吉「イヤどうも種々と御心配下さつて難有う存じます、吉松健次斯の通り両手を仕て御禮を申上ります」馬「何う致しまして御叮嚀

の御挨拶で恐入ります」牛「サア夫れでは吉も健も安心するがい、馬五郎は確かに味方になつて呉れてるから」吉「イヤどうも半次兄哥種々御骨折でございました」牛「さて何ういふ工合にして討つ事にしよう、俺達は今日にもやりてえと思ふが……」馬「左様、夜ちやア往けませんですかえ」牛「ア一夜で宜い共」馬「ちやア何とか私が致しますから少し考へさしてお呉んなさい……」暫らく腕を組んで馬五郎考へて居ましたが馬「エー今夜、四ツ少し前に鶴島屋の家の前をお三人で通つてお呉んなさいまし」牛「ウム」牛「私が帳場を出て店の妓夫太郎の居る處へ行つて何か話をしながら往來へ氣を着けて居りまして貴所方を見ると、私がエヘンと咳拂ひをして跡から貴所方のお在の處へ追掛て参りまして、而して其處で呼出しの運びを附ますから御安心なすつて下さいまし」牛「ウム有難え其ちやア然ういふ事にする四ツ前だな」馬「へエ四ツ前でございませう、早くつても往ません、トいつて遅くなつちやア猶往ませんから必と四ツ前に来てお呉んなさい」牛「宜しマア兎も角一杯やらうちやアねえか」馬「エー祝ひだから御馳走になります私に然ういつて来ませう」牛「イヤ俺が然ういつて来るから宜い」馬「然うですか、今二階へ昇つて来る時下の座敷を見ましたら、何もありませんねえ」牛「當り然よ、モウ敵を討つのは此の家は缺處になつちやうんだから品物なんぞ持て居ても仕様がねえ、皆な叩き賣つて終つて金に纏めて、困つてる人達に其となく恵んで終つた、併し懷中に金が百も無えといふのも外聞の悪い譯だ、二十や三十の金は持つて居る」馬「へエ成程、萬事にどうも行届いて、恐入りましたねえ」半次は下へ降りて行き、表の格子

が開く、間もなく歸つて来て、馬「サア湯を沸かして呉んねえ馬五郎」牛「宜しうございます、下へ行つて湯を沸かす、兎角して居る中に〇へエ御誂ひ」と酒肴が入つて参りました、茲で面白可笑しく一杯飲んで、馬「其ちやア私は油断をさせる爲に成るたけ早く歸ります」牛「今駕籠をさういつて置いた、モウ来るだらうから……」昇「へエお待遠様、駕籠屋でございます」牛「若い衆御苦勞様、氣を付けてやつてお呉れよ」馬「どうも御喧ましよう左様なら」馬五郎駕籠に乗つて矢のやうに品川差して飛ばせました後で二人は二階から降りて来て、半次と種々話をして居る中に日も暮れました、モウ大抵宜からうと日の暮れたばかりだが、日本橋から品川まで二里あるといふ位、其れが淺草田町から行くんだからマア三里と見なければならぬ、道を急いで品川へやつて参り、四ッ少し前新宿へ入つて来る、鶴島屋金左衛門の家の前、名々一本刀で前を行き過ぎ、顔だけは隠して居る、時は弘化三年十一月二十三日の晩、ヒヨイと半次が見ると馬五郎、店の若い者と暖簾の處に立つて話をしながら表の方を見て居りましたが、早くも三人に氣が着き、エヘンと咳拂ひをしたから、ア、氣が着いて呉れたなと思つて三人行き過ぎて終ひ、丁度山手の方の横丁を曲つた暗い處へ立つて三人が待つて居ると、雪駄の裏金を鳴して、チャラ／＼チャラ／＼と小足に急いで馬五郎遣つて来た、馬「御三人さんでございましたか」牛「馬、云つた通りにやつて来た」馬「どうも實に何といふ間が宜いんでせう、呼出しを掛るも掛ねえもありません、家を出て居やがるんです」牛「ウム、家を出て居るとは」馬「へエ何にい、所に居るんでございます、此の袖ヶ崎に屋

根屋の虎といふ博奕打があります、其の人が三月四月大變に取られて、夫れが爲め今夜其の人の寺博奕がございます」牛「ウム」馬「其の家に好い博奕打が集まつて居るので、野郎も打ちに行つて居るんでございませう」牛「ウム」馬「中々是が顔を買つてる男で今夜集まつてるのは品川新宿の勝五郎、お駕籠の新さん、西久保神谷町の元祖の歎屋孫、伊皿子臺町の彌吉、永井の部屋頭の齋藏、三河町の國五郎、マア此の頃名代の道樂者が列んで居ります、其處へ私が行きまして計略で呼出しを掛けて連れて来ますから、」牛「ウム宜し」其から馬五郎鶴島屋へ一日歸つて、改めて出て来て、馬「サア一緒にお出でなさいまし」牛「大きに有難う」ソコで四人袖ヶ崎へやつて来て、馬「此處に御稻



荷様がありませう」牛「ウム」馬「此の鳥居の後ろに水屋があります、其水屋の蔭の處に三人蹲踞で待つて居て下さいまし」牛「宜し、待つて居るよ」馬「今私が呼んで来ますから……」と駈出して行つたお話變つて鶴島屋金左衛門、長半の目を争つて居ると、此奴死花が咲いたのか八九十兩の金を儲けました處へ門口へ馬「へ今晩」は家根屋の虎さんの若者金十といふ男が金「何方オ、之は鶴島屋の番頭さんの馬さん」馬「家の旦那が御出になつてませうな」金「エーお出になつて居ます」馬「濟ませんけれども一寸旦那を此處へお呼びなすつて下さい急に用が出来ましたから」金「ア、然うでございませうか」奥へ来て 金十「鶴島屋の旦那」金「何だ」金十「番頭さんがお出でなすつて、急用があるから一寸旦那に門口まで出て頂きたいと仰しやいます」金は勝つて居るし、立ちたい立ちたいと思つて居た處丁度宜いと思つて 金「皆な濟まねえけれど少し立つから悪く思はねえやうに」○「アー宜いとも」金を纏めて懐ろへ入れ傍らに置いた一本刀を持つて立つた金左衛門事金五郎、頓て店口へやつて来まして 金「オ、馬五郎か、何だ」馬「どうも旦那困つちまひました」金「何うした」馬「エー鍋島様の御家來が二人と薩摩様の御家來が三人」金「ウム」馬「其れが此間からチヨイ／＼家へ来るんです」金「ウム」馬「鍋島様の津川さんといふ身分のある御方だから大事にすれば宜いんでございます、處が御職のおとみさんが嫌つてる、仕様がなにもんでどうしても座敷に出ない、其で怒つちまつて障子唐紙を叩ッ毀したり、皿小鉢を投出す、此の先き何うなるか分りません、其で私が来たんでございますが旦那濟ませんが、どうか貴郎行つて何とか話をして頂きた

いもので……」金「ウム、鶴島屋金左衛門の腕の強いのを知つて来たのか知らずに来たのか馬鹿の野郎だ、行つて俺が謝まつて納まれば宜し、納まらなければ腕を見せてやる」馬「どうか旦那お願い申します」金「オ、濟まねえけれども金十や奥へ行つて皆なに話して呉れ、斯ういふ始末だから」金十「エー何なら家の若い者、大勢で行きませうか」金「ナーニ大勢で行つても仕様がねえ、却つて騒動が大きくなつて可かねえ」是から馬五郎と表へ出て急いで新宿を指して參り、丁度彼の御稻荷様の傍の處まで来ると馬五郎横へ一寸離れてエヘンと咳拂ひをした、スルとバラ／＼バラバラと三人其れへ立ち現はれ、後へ廻つたお旦那半次、前に祐天吉松間々田の健次 金「何だ」汝達は、變な奴だ一人後へ廻りやアがつて……」牛「コレ暫らく遇はなかつたな、鶴島屋金左衛門ちやアねえ立花金五郎」金「エー……、ブーッ、ヤアお前は田町の武藏屋半次兄弟だつたな」牛「ウム俺は武藏屋半次だ、イヤサお旦那半次だ、人百歳の齡は稀だ、花に百日の盛りは無え、何日間で悪事をして世の中を隠れる心算だ、荏原郡と郡部の中へ入つても日本一の大江戸へ隣つて居て噓をすりやア品川は江戸へ聞える處だ悪事を江戸で働いて餘炎が冷たと斯んな處へ巢を作つて、知れめえと思つて居るなア馬鹿の野郎だ、サア汝の前へ立つたのは祐天吉松と問々田の健次だ、潔よく討たれて遣れ」金「エーッ」吉「コレ祐天吉松だ、汝は二言めには俺は小石川三百坂で千二百石取りの旗本だの、お玉ヶ池の千葉周作の免許取だのと巫山戯た顔を叩きやアがるが、俺が折角堅氣になつて疊の上で往生の出来る身體になつたのを、本郷伊豆倉横丁の嬉野から三日に上ず迎

ひに来て、金を貸せ〜金を貸さなけりやア兩國の巾着切だ汝は盗人だと聲高に吐しやアがる、其に驚ろく俺ぢやアねえが、女房が大事だ、子供が可愛い、堅氣にして下すつた加賀屋夫婦といふ恩人に濟まねえから、我慢に我慢をして居たが、其儘置いたら附上つて何をするか分らねえから、御茶の水へ呼出しを掛けて汝を殺さうとしたが、腕に覺えがなかつたばかり、汝の爲めに崖下へ投げ込まれ、已での事に危ふい命を辛く助かり夫から田町の武藏屋半次兄哥の處へ戻つて世話になり、水戸の御家來四ノ宮隼人先生に就て腕を磨き今度汝に遇つたらと思つた甲斐も情ねえ、本郷の加賀屋の家へ火を放つて、御舅夫婦や奉公人を斬り殺し、三丁界限焼拂ひ、丁度親類へ泊りに行て居たればこそ、おぬひと悴の七松は助かつたが、居りやア矢張り殺されたんだ」と云ひさした時には吉松も無念に堪え兼ね身を振はして聲も自づと濕みました、吉夫からは番町の岩田組に味方をして此の吉松を殺さうとしやがつたから、岩田の屋敷へ火を放つて焼拂つたは此方の罪だが、之も誰が爲め汝の爲めだ、汝のやうな惜い奴が世の中にあるものぢやアねえ、汝は不意に人を斬るのは自慢知らねえが、俺といふものが向つたからには不意にはやらね十分禿鉢巻、目貫の穴へ濕りを呉れ、尻を端折て向つて來い、吉松一人で對手をしてやるから、健次俺の目の黒え内は手を出すな、半次兄哥、俺の目の黒え内は、笑つて見て居て呉んねえ」牛流石は祐天吉松だ、サア半次は見物をして居る、健次も見居てやれ、確かりやれ立花未練のことをするな」金ウム能く云つた、然うすれば十分對手をしてやる、斯うなつたら破れかぶれ仕方が

ねえ立花の尖先を受られる者ならば受て見ろ」吉噓しいやい何を吐しやアがる受て見せるから尋常に來い」金馬五郎何だ鳥居なんぞへ倚り掛りやアがつて、汝は俺の處で長く飯を食つて居ながら恩を仇で返しやアがつたな」馬巫山戯たことをいふな、然ういふ汝が恩といふことを知つてるか、義理といふ事を知てるか、マゴ〜しやアがると俺も手傳ふぞ」金チエー殘念だ」馬何が殘念だ、チエーもツトもあるものかい」牛モウ世迷言は止しにして、半次が是に見て居るから、早くやれ」後へ飛び下つて、裾を高く端折り上げ、履物を脱いで終つた立花金五郎スラリ引抜く腰の物、吉松望んで只一打ちにと斬つて掛つた、其尖先が餘り鋭いので見て居る者がハツとして扱はられたかと思ひきや、腕に覺えの祐天吉松、ヒラリ體を轉し、腰なる一刀引抜きざまに渡り合ひました、一方は小田宮流の小太刀の名人四ノ宮隼人の免許取り、一方は北辰一刀流の免許取り、何れに愚かのあらふ筈もなく、夫れが互に必死になつての戦ひでありますから龍攘虎搏といふのはこれで、いづれも堅睡をのんで見て居ります、其内に何處に透があつたか、祐天吉松、ヤツと一聲飛び込むと見えましたが、バツサリ右の手を附根から斬り落した、ワツといつて金五郎が倒れる處を振り被つて斬らうとする時、半ア、吉、モウ其れで宜い、留めを刺しちやア可かねえぞ」吉エー、何故だ」牛何故ぢやアねえ、其でモウ敵は討てた、サア馬五郎、汝は鶴島屋へ歸つて居ろ、御處刑を頂だかなければ、上の御威光が破れるから、之れから三人で金五郎を引擔ぎ南町奉行鍋島内匠頭様へ召連れ訴へをして此方等も今迄の事を自訴するつもりだ」吉ウム兄



哥、宜い處へ氣が着いた、其れぢやア然ういふ事にしよう」半馬五郎汝の恩は忘れねえ、跡で引き合が出ても汝の罪は此方等三人被つてやる」吉馬さん、死んでも此の恩は忘れねえ」涙を流して馬五郎「馬御目出たうございませう」と其儘鶴島屋へ歸りました、其時健次は後へ下つて、健次で兄哥達、未練の事をいふやうだが、長の年月俺が不孝をした只一人の母親が國に残つて居る之から急いで間々田へ行つて親に會つて相當の手當をして来てえと思ふ、ナニそんな事をいつて土俵際で逃るとお前達が思ふなら仕方がねえ、此儘一所に名乗つて出て御處刑になつて終ふが俺の了簡を知つて居たら向ふ十五日か二十日許り暇を呉れねえか、後から必と名乗つて出る」半アア宜いとも、汝の了簡は知つてる、其ぢやア吉、汝の持金も乃公の持金も健次に遣らう」涙を流して健次は喜び間々田を指して出立致しました。

(第三十七席) 相の川政五郎の事、並に淺草寺濡佛の事

扱健次は吉松、半次に別れて江戸を離れ、弘化三年十一月二十六日の日に東上州の館林まで参りまして、野州の間々田へ入らうといふ考へだが、イヤどうも鶉の目鷹の目役人の厳しい事、今度御旦那半次、祐天吉松、立花五郎の三人が鍋島内匠頭様へ出てからといふ者は、確かに間々田の健次は此方へ来たに違ひないといふので網を張つて居るから、却々どうして間々田へ入る事が出来ない、ア、困つたものだ、是まで来て阿母に逢つて不孝の詫言をして、幾らか金を置いて、

然うして跡腐れの無いやうにして、訴へて出ようといふ考へだが、逢はずに之から江戸へ歸つては折角の心盡しが水の泡だ、何としたら宜らうと種々考へたが、茲にヤクザ者として日本一の大親分といつて差支ないといふ、剛い親分といふのが相の川の久保村といふ所に居ります、高瀬仙右衛門といふ人、此人は博奕打の方では相の川の政五郎といひます(又五郎といふのは此の人の乾兒でございます)十手取繩を預かつて居て、信州の権戸といふ所に女郎屋を出して居た時分には上總屋の源七と云ひました、醬油問屋で造酒屋を致す、此の方では高瀬仙右衛門を名乗る、一人で三ツ名前のある人でございませう、先づ當時此の位の親分はないから、此の人にお願ひ申して親の所へ連れていて貰つて逢つて頂いて、親分の繩に掛つて江戸へ送られて行かう、必ず共に此の位の事は聞いて下さるに違ひないと、斯う考へまして、尋ねて行く博徒とはいひながら旦那と人が呼ぶ位の権識、此の人が何うして博奕打になつて、金が出来たかといふに就て、一寸先祖の御話から申上りますが、上州館林といふ所は、延寶の八年から寶永の四年までの間天領で、御領主様がなかつた、寶永の四年に至つて松平右近様が此の土地の御領主になつたのでございませう、天領ゆゑに土地の百姓が課役運上御年貢金御上納の時には、江戸馬喰町の郡代屋敷へ上納金を持つて来るのでございませう、時に大久保村の名主高瀬善兵衛といふ人、百姓を大勢呼びまして、善「さて今年の上納金を江戸の郡代屋敷へ持つて行くのは誰に頼んだら宜らう」○「左様でございませう、成だけ堅い者を一ツ頼みたいものでございませう」善「左様さ去年運上金を持たしてやつた者

が行方知れずになつて終つて、未だに分らない、村方の者が二重に納めたやうなえらい災難があつた、其ちやア寧ろその事私が行つて来やう」〇「どうも名主様濟みませんでございませぬ」善「イヤ是も村中一體の人の爲だから私が行つて来やう、上納金は皆な私の所へ持つて来なさい」と各々のを集めまして、一々預り證を渡し、善「ちやア私は明日出立をするから留守を何分お頼う申すよ」〇「どうも名主様御苦勞様でムいます」ソコで貞享の元年十一月十八日に大久保村を出立いたし、古河から栗橋、幸手、杉戸、粕壁と参りまして、粕壁の伊勢屋へ泊り、翌十九日に千住から山谷堀へ出て蔵前の天王橋の所まで参りました、天王橋の傍の所まで来ると、ワーツといふ人聲だ、高瀬善兵衛、何だらうと思つて伸上つて見ると、町内の木戸際の所へ立上りました四十二三の浪人者、大刀を振被つて居る其の周圍を御用聞が、〇「御用だア、神妙にいたせ、御用だ神妙にいたせ」といつて十二三人で取巻て居ります、處が此の浪人者が恐ろしい權幕だから、却々傍へ寄り附く者が無い、御職業とは云ひながら御用聞は辛い役で、どんな劔の下へも向つて行かなければならない、甲「何でせうアノ浪人は」乙「彼は湯島様の御金藏へ手を掛けた賊ださうでございませぬ」甲「ハア然うですかえ……ア、切られたく一人御用聞が切られた」其の中に何處から駈けて参りましたか一人の御用聞が階子を持つて来て、其の階子を浪人者の方へ向けてドンと打倒すと丁度階子の間へ浪人首を突込んで終つた、アツといふ中に階子をグイと前へ引いたから、バツタリ倒れる途端に御用聞が残らず飛び掛つて到頭其奴に繩を掛けて終ひました、見て居た者思は

すドツと聲を揚げて、御用聞の働きを賞める、中に高瀬善兵衛は、ア、豪いものだ、商賣くくと云ひながら流石日本一の大江戸の御用聞さんだと感心をして郡代屋敷へ来て御年貢を納めに来たといふ趣きを届けると、御役人が「ア、左様か、大久保村の名主高瀬善兵衛村方の者の上納金五十兩、是へ出しなさい」善「ハイ」といつてヒヨイと懐へ手を入れて見ると驚いたのは胴巻へ入れて来た五十兩の金がない、ハテ不思議なと能く見ると右の脇腹の處がズツと一文字に着物が切れて胴巻まで裂けて居ります、見る／＼間に顔の色が變りました高瀬善兵衛「善」エー御役人様へ申上げますが私は淺草觀音前の立花屋といふ旅籠屋へ泊つて居りまして、ツイ胴巻を失念致して参りました、直きに取つて参りますから少々御待ちを願ひます」まさか召捕ものを見て居て胴巻を切られて金を窃られましたとは云はれませんが斯ういふと、役「ア、左様か、胴巻を失念いたすとは失錯つたことだ、紛失致すとならんから早く参れ」善「へエ恐入ります、泊り附の宿屋でございませぬから、大丈夫間違ひはございませぬが、私とした事が疎勿をいたし面目次第もございませぬ」役「今日は最早時刻も遅いから、是から行つて持つて参る内には役所は退ける、明朝参つたが宜らう」善「どうもお柔さしい御言葉を頂だきまして、有難う存じます」と其儘表へ出たが、ア、江戸といふ所は生馬の目を抜くといふが全たくだなア、何うだらう、己れが盜賊の押へられるのを見て居る、其の見て居る中に矢張り盜賊が居て、巧みなものだ、俺の着物を切つて、胴巻まで裂いて金を抜いて行くといふのは何といふ事だらう、俺の家も長年名主をして居るが打

續く不仕合せで貧乏をして居る最中、國へ歸つて大勢の者に對して、斯ういふ譯で五十兩の金を
 窃られた、モウ一遍上納金を出して呉れるなど、は云はれず、好い年をして女房や子供に合せる
 顔もない、縦令皆なに話した所が、誰も眞とは思ふまい、江戸へ行て博奕でも打つたか、女郎買
 でもして使つて終つたのだらうと思はれるのは知れた事、ア、何としたり宜らうと暫し思案に暮
 れて居りました、不圖心着いたのは下谷通新町に綿屋をして居る海老瀬屋茂兵衛といふ者があ
 る、元隣村の海老瀬村といふ所から出た者で、可なりをやつて居る事を聞きましたから、故郷へ
 歸つて何う都合するまでも其所へ行つて一時借りて上納して行かうと、其から通新町へ來て尋ね
 ると直ぐ知れました、茂「イヤ之は旦那様能く御出になりましたサア、奥へ御通り下さい……」
 茶煙草盆を出して待遇し、茂「今度は何御用で此方へ御出で……」善「誠に御氣の毒だが茂兵衛さ
 ん、少しお前に頼みがあつて來た、國へ歸ると直ぐに届けて遣すけれども何うだらう、五十兩都
 合をして貰ひたいが」茂「ハイ畏こまりました、シテ何に御遣ひになります」善「實は是々斯々いふ
 譯でイヤどうも餘り疎勿かしくつて、國へ歸つて組頭に向ける顔もない、内々で用立つて貰つて
 上納を済まして歸つてから早速金はお返し申す、どうか都合して貰ひたい」茂「承知いたしました
 た、併し手許にございませすれば此の場で直ぐに御間に合せますが、少し手許が都合でございま
 すから、一寸他へ行て拵へて參ります、ナニ五十兩位りどうかありません、何日御上納なさいま
 す」善「明日の朝出て、昨日遅くなりましたから今朝持つて出ましたと、斯う云はふと思ふので……」

「茂」さうでございませるか承知いたしました」と茂兵衛が、快く受合て呉たものだから、善兵衛
 も安心をして待て居る、所が夜食をして終つても歸つて來ず、五ツになつても歸つて來いから、
 善兵衛心配をして居りますと、漸々五ツ半頃になつて茫然歸つて來た、善「誠に旦那様お氣の毒様
 でございませが、彼方此方廻つた所が、どうも折悪く不都合でございまして、今まで廻つて出來
 ません、と云つて他の事と違つて、些とばかり半端に持て參つても仕様がございませんから、歸
 つて參りましたが、如何でございませう、今晚はモウ遅うございませうから、お泊りになつて、明
 日御國へお歸りの上改めてお納めにお出でなすつてはどういふものでございませう」善「イヤ之は
 茂兵衛どん、飛だ心配を掛けた、夫ちやアお前のいふ通り、然ういふ事にして今夜は一晚御厄介
 にならう」茂「さうなさいませ、折角のお頼みを御役に立たないで御氣の毒様でございませう」善「ど
 うしまして、私こそお氣の毒な事をしました」と其の晩枕に就きました、善兵衛眠られません、
 ア、困つた事が出來た、どうも金を盗られたと云つては國へ歸れず、何か江戸へ出て浮た事でも
 したと思はれては面目ないと、種々考へて居る内に、此の善兵衛といふ人、性來正直な、極氣の
 小さい人でございませうから、寧ろ之は死なうと覺悟をした、ソコで夜中にソツと起出で、兩戸を
 開けて庭の切戸口から表へ出たが、併し氣の狂つた譯でもないから、出は出たが、五十兩の金で
 死ぬといふは智慧のない話だと、考へ、何時か千住の大橋まで來て、橋の端で川水を眺めて居
 りましたが、金を盗られたと云つて茫然歸られませず、と云つて死ぬのも愚、どうしたら宜らう

と、暫時大橋の欄干の傍に蹲踞で思案に暮れて居りますスルと向ふから小田原提灯を點けてトツトツトツ〜足音烈しく飛脚體の男が駈て來ると、後から同じやうな姿の男が一人駈て参りまして、先へ立て來た男の傍へ寄るかと思ふと、ヤツと云つて切拂つた、橋の欄干の所に蹲踞んで居た善兵衛此の體を見て驚きさまに立上ると彼の男善兵衛の方へ向つてソレ持て行けといふと突然



バツと投つた、善兵衛夢中で何か打ち附けられたのか分らないが死ぬのも忘れて其の包んだものを持つた儘ドン〜逃げ歸つて茂兵衛の所へ來て見ると、庭の切戸が明いて居るから入つて元の通りに締め、雨戸も閉つて座敷へ入りホツと一息、人が切られてさへも此騒ぎだ、自分がボカリ

飛込んだから何の位苦しいか知れない、ア、忌だ、耻を搔ても死なねえ方が宜い、夫は然うと何で此な物を人に叩き附たのだらう、と彼の包を開いて見ると革財布、ハテナと逆にして振るとゴロ〜と中から百兩包みが五ツ出た、どうした事かと善兵衛夢に夢見た心地して、暫く考へて居りましたが扱は天より俺に之を授けて下さつて、死ぬのを留めてお呉んなすつたが、之は此儘黙つて居て、五十兩上納して残りの四百五十兩は國へ持つて歸らうと考へて居る内に、モウ夜明方、スツカリ此の金の仕末をして行ひ濟まして居ると茂兵衛が「茂」お早うございます「善」イヤどうも茂兵衛さん、飛だ御心配を掛けましたが、之から芝の方に懇意の者がござりますから其れへ行つて一ツ話をして、若し出來なかつたら一旦國へ歸つて出直して來る事に致します「茂」ア、左様でございますか、折角のお頼みを間に合ひませんで、何とも御氣の毒でございます「善」イヤ何ういたして、飛だ御世話になりました、何れ又改めて御禮に上ります」と禮を云つて茂兵衛の家を出て、五十兩の金を郡代屋敷へ上納して無事に國表へ立ち歸りましたが、只四百五十兩の金を寝かして置くのも滿まらない、之を資本に醬油を造り出さうといふ考へ、其から此の善兵衛が造り醬油を初めました、所が間の好い時には不思議なもので、此の造り醬油が二三年トン〜拍手に當りまして、大層大金儲けをいたしました、夫から丁度三年目又課役運上の上納金に就て、村の者が「〇」どうか旦那、貴所が納めて下さる譯にはなりませんか、此の前旦那に願ひましたアノ翌年は大分豊年でございました、これも延喜物でございますから、どうか旦那御迷惑様でも今年

も御納めを願ひたいもので「善」ア、然うか、其ちやア俺が一つ納めに行つてやらう」とソコで又上納金を集めて、皆んなに途中まで送られて善兵衛は江戸表を差して来る、道中別段のお話もなく、千住の小塚ヶ原まで来ると此所は天下の御處刑場、大勢立つてゴヤ／＼話をして居るのを、何がまるのかと思つて見ると、獄門臺に曝し首が二ツございます、捨札に「上州玉村無宿熊右衛門、同由五郎」としてございます、前に立つて話をして居るのを聞く「甲」エーオイ、世の中に此んな馬鹿野郎もねえもんぢやねえか「乙」へエー何うしたんですえ「甲」俺は或る御用聞から聞いたんだが、三年跡に千住の大橋で、金飛脚を切りやアがつたんだ「乙」へエー成程「甲」其の吸取をして居るのが此の由五郎で仕事をこの方此の熊右衛門といふのだ「乙」ウム「甲」金飛脚を切つたから吸取の方へ渡すんだ、何時御用と食つただからつて己の懐中に金かなければ其までの事だ、熊右衛門が飛脚を切拂つて、金を取ると突然、ソレ持つてけと吸取の由五郎に渡す、由五郎が之を受取つて持つて歸つた、熊右衛門は仕事をしたから入谷に由五郎が世帯を持つて居るので其の入谷の家へ金を受取りに熊右衛門が行んだ「乙」ウム「甲」行くと喧嘩になつて「乙」へエー「甲」俺の方では受取らない、何でも汝に渡したといふんで、段々聞いて見ると吉原の三河屋といふ家に馴染の女郎があつて、其處へ由五郎が一寸寄つて女と話をして居る内に、どうしても昇らなけりやならねえ場合になつて、熊右衛門と約束をしたけれども三河屋で遊んで終つたといふんだ「乙」ウム「甲」所が熊右衛門の方ちやア欄干の所に確に突立つて居たから渡した、イヤ俺は其の晩往か

ねえので喧嘩になつて、到頭其から露顯をして、二人とも召捕りになり、大變調べが手間取つて漸々今度調べが済んで獄門になつた、何しろ對手が佐竹様の金飛脚といふんだから金はウンと持つて居た、其の飛脚を殺して、金を何うして終つたのか一文も遣はねえで兩人とも召捕られて獄門になるたア、随分馬鹿な盗賊もあるもんだ「乙」道理で口惜さうな面をして居やアがる」と高ッ調子で話をして居るのを聞いた善兵衛、心中に扱はと思ひましたが、早々郡代屋敷へ上納して、歸りは御處刑場を通るのは何となく心持が悪から、三輪へ廻つて國元へ歸りました、然るに只今は能く神經といふ事を申しますが、稱へ方こそ違つても昔から矢張り斯ういふ事はありまして、善兵衛は其れから後、寝ると、齒をむき出して目をパツチリ明いて、さも口惜さうな顔をして居る二ツの首が、己れの目前にちら附きます、膽を潰して起き上がると寝汗をビツシヨリかいて居る、汗を拭き取り寝夜を着換へて寝ようとすると、又た二ツの首が目前に見える毎晩毎晩寝る事が出来ないから、善兵衛考がへて、此の儘にして居ると、此の首の爲めに取殺されると思ひ、ソコで今では立派な身代になつて居りますから、檀那寺へ參つて和尚に此の話をし、どうしたら此の怨みを避けるやうになりませうか、どうか一ツ和尚さん御工夫を願ひたいと、其から段々相談の上、罪障消滅の爲め何か寄進したら宜からうといふ事になつて、固より五百兩といふ金の爲に幾干といふ金儲けをしたのでございますから、先づ五百兩といふ見積りで二體の濡佛を作らへ、人の目に立つ所と思ふから、其れで淺草寺の地内へ納めました、御案内の通り仁

王門の前の所に今以て二體据つてございます、臺石に彫附てありますのは、東上野國邑樂郡大久保村高瀬善兵衛直房、貞享四年八月十九日としてあります、又向つて左に彫附てあるのは武藏國足立郡千住高瀬奥右衛門直之、安永六年酉三月再建としてございます。

(第三十八席) 政次郎母子の對面を計る事、並に士農工商獄門の事

然るに文政元年に當時の大久保の名主の悴仙八郎といふ人が供養に来て、吉原仲の町の角屋といふ引手茶屋へ見番の藝者を總揚げにして、大騒ぎを致しました、之は高瀬善兵衛の子孫でございます、丁度前申上げた善兵衛から五代目の人高瀬仙右衛門が上總屋源七、相の川の政五郎といふ大きな親分になつて、其の頃群馬の三家と申し一人は都賀郡生井の彌兵衛、樂燒の茶碗のやうに全身が疵だらけだから、之を疵の彌兵衛と申します一人は館林の香具師彌七、之に政五郎を加へて群馬の三家と申します、時に弘化三年十一月二十六日間々田の健次が故郷間々田村へ入つて來ると、チラ／＼チラ／＼雪が降つて來た健「ア、久しぶりで歸つて來たが相變らず元の形だ、アノ向ふに見える稻荷様の處から三軒目の家だつて、ア、明火が差して居る、氣も勇んで足早やに行かうとすると、向ふから簑を着た者が二人、一人は六尺の棒を持つて居ります一人は御用と書いた提灯、ア、悪い者が來やがつた、困つたなアと、ヒョイと大きな杉の木の下へ隠れやうとした、スルとバラ／＼と駈けて來た二人左右から詰め寄つて一人が御用提灯を出して、〇「汝は

何だ「健」へエ、私は旅の者でございます」〇「旅の者だウム然うか、旅の者なら差支へなく通つたら宜いだらう、何も六尺棒と御用提灯を見て、身體を隠すにやア及ばねえちやアねえか、迂散臭くねえ事もねえだらう、兎も角も御屋敷へ行け、出る處へ出て言譯をしる、近頃檢ためがあるんだから……野郎面を能く見せろ」被つて居た笠の紐を解いて健「へエ」〇「ヤア汝やア十四年前間々田の角五郎を盆の上で斬つて立ち退いた健次だな」健「失錯たツ」バラ／＼と逃げようとする奴を一人が六尺棒を持つて後から振り下す處を體を轉したから、ノメを突いて大地を棒ではたいいた途端に南蠻鐵角鐙打つた脇差の線形でバツと突上げたから、額を破つてタラ／＼と血汐が流れ、アツと倒れる處へ御用提灯を持つて居た一人が、提灯を向ふへ離して置いて後ろから御用だツと襟の處へ手を掛けた、腰を捻つて鮮目を敲き附けるやうに投げて置いて、起き上らうとするを、ドーンと一つ蹴つたまゝ、バラ／＼と僅かの間に降り積つた雪を、大根卸しのやうに踏み散らしてドン／＼逃て來て健「ア、驚ろいた、此處は何處だらう、ウム何でも在方に違えねえ」コンモリ茂つた森の中に佇で健「ア、残念だなア、此處迄來て阿母に逢ふ事が出來ねえといふのは、寶の山に入りなたら、手を空しく歸るやうなものだ、己が家の明火を見て入ることが出來ねえ、斯うお檢ためが厳しくつては逆も駄目だ、ア、何うしたら宜らう……、ウム然うだ、モウ仕方かねえから高瀬の旦那の處へ行かう……」前申上げた高瀬の上總屋源七事相の川政五郎親分、初めて此の人が工夫して造らへたのが高瀬船といつて今に残つて居ります、昔江戸表から信濃

路へ逃げて行くには、どう避けて通つても上州へ足を入れなければならぬ、其の時には博奕打が高瀬の身内だ、相の川の身内だと云へば、どんな親分衆でも世話を致した位、其の政五郎の處を便つて翌朝健次はやつて参りました、相の川大久保村へ来て見ると大きな家と土蔵の三戸前もある、堅氣の旦那衆の出入をする處と旅人博徒の出入をする處と口が別になつて居る、其れは健次も知つて居ります、ヒヨイと中を覗いて見るとズラツと履物が並んで居る中に草鞋なども脱ぎ捨て、あります、ア、親分達の寄合ひでもあるか知らんと、ガラ／＼健へエ御免下さいまし、御免下さいまし、〇「ハイ……何處から來なすつた」健「親分様は御在宅でございませうか」〇「ア商賣人かえ」健へエ御仲間でございます」〇「ウム何といふ人だ」健「エ仔細ございまして此處では名前を申上る事が出来ません、親分に御目に掛つた上申上げ度う存じます、其とも名も名乗れねえ者は親分に遇はせる事は出来ねえと仰しやれば據るございませぬ、申上ますが我儘を申して甚だ恐入りますかどうか一つ御取次を願ひます」〇「ナニ私やア取次だから、中で計らつてお前さんを歸して了つて跡で小言をいはれると可いねえ、一寸聞くから待つて居て呉んなせえ」健へエ「行かうとして又引返して」〇「一寸斷つて置くが、知つての通り家のはどんな立派な博奕打の親分でも旦那といはなけりやア口を利かねえんだから其の積りで……」健へエ宜しうございませうツイヤクザの口癖になつて居りますので親分と申しました」奥へ行て是々と取次ぐと、今日は何か博奕打の寄合ひで、大勢列んで居ります其の突當りの處に居る政五郎之を聞て 政「ア、然うか、

差支ない通してやれ、皆な少し今の話を待つて呉れ、俺に遇ひてえといふヤクザが來たといふから「△私共は次へ行きませうか」政「ナニ構はねえ名前目もねえ奴が來やがつたのに、お前達が立つにやア及ばねえ、此處へ呼んで宜い、又其の旅人が萬一お前達に怨みがねえとも限らねえが然うした處で餘り荒え事をして呉れるな、俺の家に免じて何事もしちやア往かねえ」△「へ宜しうございませう」政「ちやア久藏此方へ通せ」久「へ宜しうございませう……、オーお昇り、旦那へ申上げた處がお遇ひ下さるといふから親分衆も大勢列んで居る」健「ア、然うでございませうか、御免下さいまし」案内の者に連れられて、昇つて來てガラリ襖を開けて見ると親分衆がズラツと列んで居る 久「へエ此男でございませう」政「ア、然うか」ジロツと見て 政「此方へ入れ」健「有難う存じます」政「敷物はやらねえ此處へ座れ」健へエ「政「俺が相の川の政五郎だ」健へエ「野州に居て散々ヤクザをして坂東八ヶ國を荒らし、江戸へ出て、屋敷稼業になつて祐天吉松に一臂の力を添へて此の度の始末になつた間々田の健次だから關八州の博奕打は大概知つて居ります、今申し上げた通り突當りに居るのは相の川の政五郎、其の側の一子分の又五郎其の側が弟の相の川の金太郎、大山の茂八、小伏村の幸七、山田屋伊傳次、神田屋辨吉、信州の八幡の常吉、此の八幡の常吉は相の川の身内ではございませぬ、其の傍に群馬三家の生井の彌兵衛、香具屋彌七等ズラツと列んで居る、處が此香具屋彌七の子分間々田の角五郎といふ者を健次が斬つて國を立退いたのでございませぬ、香具屋彌七がジロツと見て 政「ヤア汝は俺の家の角を斬つて立ち退いたお



尋ね者の健次だな」健親分暫らく御目に掛りません、間々田の健次でございます、御存じの通り貴所の御身内の間々田の角が、私が漸と盃を一枚二枚敷くやうになりましたら、誰に断つて此の土地で盆を敷いたと云ひますから俺は此の土地の生れた、親分取らずの一本生、博奕打になつて此の土地で盆を敷いたが其れが何うしたといふと、然んなら汝斯うしてやると突然さま二三人の子分と共に私に斬つて、掛りました親から貰つた五倫五體、赤の他人に斬られては親へ濟まねえと、轉す氣もなく身體を轉すと、前へ流れて來やがつたので、ツイ殺て終ひました、先方で殺さうとしたから、此方でも殺しましたが香具屋の親分夫が何うしたんでございませぬ、貴所の身内に私が斬られてやつたら、貴所は苦情がねえんでございませぬ、御自由の者でございませぬ、私は今此處へ貴所に遇ひに來たんぢやアねえ、且那に御目に掛りに來たんでございませぬ、私が旦那にお話をしたつた後で子分の敵を討つといふなら、香具屋の親分表へ出てお呉なさい、命の遣り取りでも何でも致しませぬ、此の場になつて臆びれた事は申しませぬ、モウ私は今日あつて明日ねえ露のやうな薄い命になつて來たんでございませぬ、貴所が斬の斬るらねえのといつても私の命はモウ向ふ十日とは無えんでございませぬ、政「オイ彌七」彌「へエ」政「斯な小僧子を對手に群馬の三家とか何とか云はれる者が彼是にふなア大人氣ねえ、靜かにしろい」彌「アハ、ハ、ハ、イヤ私とした事が、ツイ例もの子分思ひから飛た事を云ひました、考へて見りやア體裁が悪うございませぬ、健次勘辨しろく」健「へエ、どうも恐入ります、流石は大物でございませぬ、能く御得心下

さいました、扱旦那私は然ういふ譯で角を切つて土地を立退き、暫らく江戸へ出て居りまして、本所原庭の三河屋萬藏といふ元博奕打で、諸家様人入町人、俗に元締と申します其の三河屋萬藏の子分になりました、其處へ養子に來たが祐大吉松といふ男で、之と兄弟の約束を致しました、此の吉松の女房が仔細あつて吉原で遊女になりました處、番町の御旗本岩田組の岩田七太夫といふ人が御通ひなすつて、云ふ事を肯く肯かねえの間違えから吉松と意恨になり、吉松を殺さうとした事が幾度となくありました、然るに吉松は水戸の家來四ノ宮準人の免許取りで中々強うございまして容易に討てません、ソコで計略で吉松を到頭大勢で駕籠へ乗せて番町の岩田の屋敷へ連れて行つて殺さうとしたのが、弘化元年の六月十六日の晩でございます、庭の松の木へ縛し附けて身體へ酒を吹て蚊にせ、らして置いて、拂曉になつたら殺さうといふ慘酷の仕方、其を田町に居るお旦那半次といふ之も吉松の兄弟分、私にも兄哥になつて居る此者と二人で相談をして吉松を助けに行りましたが、他に手段もないので屋敷へ火を放て火の中で怨み重なる旗本を二三人斬りまして吉松を助けました、吉松は又舅の敵と狙つて居る立花金五郎といふ者がありまして、到頭此の十一月二十三日品川袖ヶ浦で片腕を打落し、息の根を留めては上の御威光に拘はるといふので、息のある身體を引擔いで南町奉行の鍋島内匠頭様へ訴へ出ました、就いて私は此の間々田に阿母と兄弟が一人残つて居りました、不圖風の便りに聞けば阿母が眼病で私の事を云つては案じ居りますさうでございますゆゑ、懷ろに持つて居る使ひ残しの金を阿母と兄弟に遣り、今ま

での不孝の罪を詫びて江戸表へ引返し、名乗つて出て御處刑を受けようといふ考へで半次吉松も承知の上で昨晩漸と参りまして、私の家の手前二三間の處まで参りますと雪が酷く降つて來ました、ア、結構な雪だ、是で清く訃言が出来るかと、半窓の明火を的に参ります途端に向ふから御用提灯六尺棒、脛に疵の譬へで吃驚して杉の木立ちを小楯に取りやり過さうとした處が、御職掌柄早くも目を着け、右左から押へられ、汝は間々田の健次だと云はれて據らなくお手向ひも致しました、併し命は取らねえと思ひました、夫から在方へ逃げ込んで夜を更かし、モウ是は高瀬の旦那を願ふより外仕方がないと思つて此方へ参りました、相濟ませんが川向ふの間々田へ参りまして、阿母に訃言を致し、渡す金を渡して親分の御繩に掛つて江戸表鍋島内匠頭様御屋敷へ引かれて行きてえ願ひでございます、どうか旦那の御情けて今一度親に遇はせて頂き度う存じます、其とも成らねえ、直ぐに繩に掛れと仰しやれば、私は此の場で舌を嚙んで御繩を頂だかすに相果て終ひます、此の懷ろに金が五十兩ありますから、どうか之を阿母へ届けてやつて下さいまし、何れとも宜しくどうか御差圖を願ひます、イヤ御一統様の御寄合の中を切りまして甚だ恐入りましてございませ、香具屋の親分之間々田の角さんの敵も討てたと思召して何うか御勘辨を願ひます」鬼のやうな、貸元手合親分衆もア、感心な奴だと面々涙を溢しました、此の時相の川又五郎といふ一子分が又「エ旦那之は私からお願ひ申して外の者に交情のある義理はないと思ひますが、然うしてやつてお呉んなさいな」政「ウム然うか俺は御用と云ふ字を預つて居る身分、此奴

を家へ連れて行てやる事は出来ねえけれども、宜し其ちやア今俺が駕籠を釣らして迎ひを出してやらう、兄弟といふのは何だ」彌へエ兄貴でございませう」政「ウム兄哥か何といふ」健「治兵衛と申します」健「達者か」健「久しく遇ひませんが達者だといふ事を聞きました、阿母はたしか眼病で寝て居る筈でございませう」政「ちやア今呼んでやるから心配するな」健「有難う存じますどうぞ旦那宜しくお願ひ申します」政「駕籠の支度が出来たら金七武兵衛富藏勘太、四人で駕籠の周囲を取巻いてツて何處へ行くと仲間の者が尋ねたら、汝等も目明して十手取縄を預つて居るもんだ、此奴等に調べる事があるといつて連れて来れば仔細はねえ、宜いか」金「へエ宜うございませう、此方等四人が往けば何咎める者はございませう」政「其れも然うだ、都賀郡を廻つたのは誰だ」金「兵太郎に春助でございませう」政「然うか道理で歸つて来ねえと思つた、健次其れに相違ねえか」健「親分殺す氣遣ひでございませう、只密と殴つて密と目を廻さして置たぐいで」政「籠棒めえ、叮嚀に目なぞを廻させられて堪るものか、暫らく待つて居ろ」頓で駕籠が二挺来る、四人の子分が迎ひに行き、健次の阿母と治兵衛を載せて連れて参りました、治兵衛は駕籠から出て、見ると驚いて「治」ヤア汝は不孝者の健次だな、阿母さん健次の野郎が此處に居ますよ」母「エ、ツ健次が……」健「ア、阿母さん暫くでございませう、今更何と言譯の仕様はない、不孝の罪は詫ても仕切れませんが、愈よ今度はお上の手で御處刑になる身體、御暇乞ひに参りました、どうぞ今までの事は勘辨してお呉んなさい、兄さん之は些細でございませうが阿母さんに此の金で薬を買つて上てお呉んなさい」

治「エー汝のやうな奴が悪事をした金を貰つて正眞無垢の阿母さんに薬が上られるか、兄が不承知だ」母「ア、治兵衛や、お前のいふのは尤もだが、健次が折角暇乞ひに来たのだから……」政「ウム阿母の云ふ通りだ、此の政五郎が預つてやるんだから、治兵衛どん黙つて取つて置きなさい」治「へエ、有難う存じます、親分様の御情で親子兄弟對面が出来、目の不自由な阿母も嘸嬉しい事でございませう」政「マア緩くりと話をしなせえ阿母は大分身體が悪いやうだ、今醫者を聘んでやるから其の間に健次能く話をするが宜い」健「へエ重ねの御情有難う存じます」其儘政五郎は障子を閉て次へ出る、程なく聘びに行つた醫者が来て阿母の脈を取り、ひどく脈がはずんで居るから少し静に寝かさなければ可ない、といふのは嬉いやら悲いやらで阿母が心臓に故障を起した者でございませう、密と横に臥させ枕許で兄弟が酒を飲む乍ら種々の話に一夜を明す、翌朝になると阿母と治兵衛は禮をいつて又駕籠で送られて間々田へ歸り、健「サア親分御繩を頂戴致しませう」政「イヤ俺は繩には掛けねえ、汝も望みが届いた上は潔よく江戸町奉行へ自訴して出る、金を阿母にやつて終つて懐中が空だらう、幾らかツルも要るもんだから、十兩遣るから持つて行け」健「有難う存じます、草場の蔭から、御當家の御繁昌を祈ります、左様ならば御暇を致しませう」と厚く禮を云つて高瀬村を立去りました、時に弘化三年十二月六日數寄屋橋御門内、鍋島内匠頭様の御門の處へ、健「へエ願ひます、願ひます」門番が見ると朴訥の百姓體の男でございませう門番「何だ」健「お願ひでございませう」門「イヤ差越し願ひは相成らん、願書を以て願へ」健「エー私は

自訴いたす者でございます「門」ナニ自訴、何だ「健」エー暫くお上の御目を窃んで居りました、上州都賀郡間々田無宿の健次と申す者で、品川本宿の遊女屋鶴島屋金左衛門事立花金五郎を半殺しにして、其を擔いで訴へて出ました祐天吉松、淺草田町二丁目の武藏屋半次の兄弟分でございますして、番町岩田組の旗本を斬り、屋敷へ火を放けました兇狀がございませす「門」さうか此方へ這入れ「バラ」と出て来て周囲を取巻き、與力の詰處へ連れて参りました、當番の與力は加藤又左衛門といふ人で、直ぐに繩を打たせました 又「どういふ事情であつた」健「エ、之々斯々でございますます」又「ウムさうか」其處で下調べが済んで、お掛り鍋島内匠頭殿へ申上げると 内「左様か、其は神妙の奴である、劬つて遣はせ」ソコで傳馬町御牢内の隅の二番といふ處へ入れられました が、モウ直きに御用終ひになりますから、早く調べて了はなければなりません、愈よ十二月の十日に引合ひ總調べといふ事になりました、お白洲が立つ、改めて喚出されたのか腕を斬られて御牢内で療治をして頂いて眞蒼な顔をして居る立花金五郎、反繰返ると往けないから獄卒が腰繩を取つて肩口の處を押へて居る金五郎の女房のおさと引合として番頭馬五郎、又間々田の健次、祐天吉松、武藏屋半次、之だけ喚出される事になりました、其から之も引合人として本所中の郷原町の三河屋萬藏は少し遅れてお腰掛けから喚込まれました ○「掛り合一同揃ひましてございませす」と申上げると鍋島内匠頭殿が 内「ア、左様か」吉「エー恐れながら祐天吉松申上げます」内「ウム」吉「弘化三年十一月二十三日、品川袖ヶ崎に於きまして立花金五郎事鶴島屋金左衛門を斬りました

事の起りは私の元養父、本郷二丁目の加賀屋七兵衛夫婦を殺し、猶家へ火を放け財産まで奪ひました、親の敵家の仇たる立花金五郎を討たんが爲め永年苦心をいたし、諸國を尋ねて、あるき苦辛の末少しの手掛りから金五郎の鶴島屋なることを知り、品川袖ヶ崎へ呼び出して多年の本懐を遂げましたが、殺して了つてはお上へ相済みませんから半殺しに致し、私と半次と二人にて金五郎を擔きお訴へ申しました次第、又私は之に居ります本所中の郷原町三河屋萬藏の處に長らく厄介になつて居りまして、また萬藏も私も可愛がつて呉れましたので、世間では私の事を三河屋の忤であるの養子であるのと云ふ噂もありますが、飛んだ萬藏に迷惑を掛けて氣の毒千萬でございます、決して親子でない證據には町人別をお調べ下さいませすれば明かでございます、其から聊かの事の間違ひより、番町岩田組の頭、岩田七太夫と争ひをいたしまして大勢の旗本の爲に取押へられ、既に命を失ひまする所を、那れに居ります健次に半次の二人が、岩田の屋敷へ火を放けて七太夫初め旗本を切つて私を助けて呉れました、此件の爲めに金五郎討取の後一所にお訴へ申しました、又健次は一人の母に別れを告げたいといふので、故郷の間々田へ立歸り、夫れが爲め我々に遅れて自訴致しましたやうな次第でございます、最早何も包み隠す事もなければ、思ひ残す事もございませせん、どうかお上の御法通りお處刑を願ひ度う存じます、また那れに居ります馬五郎と申します者は、此の事に付きまして一切關係のない者でございます「内」ア、左様か、之れ馬五郎、只今吉松が申す通り、其方は此事に附ては全然關係はないか「馬」へエ、全然ご

ざいません、丁度那の節私は袖ヶ崎の友達
 の所へ遊びに參つて居りまして、圖らずも歸
 つて參りまする途中で、此の三人の方が、主
 人金左衛門をお斬なすつたのを見て喫驚い
 たしました、後で主人金左衛門は立花金五
 郎と申す悪人だといふ事を初めて聞いて驚ろ
 きましたやうな次第でございます「内」ア、左
 様か、金五郎妻さんと「ハイ」内「其方儀は
 立花金五郎と共に上野宮家御院代持照院を欺
 し、相對間男をいたし持照院より金を奪つた
 覺えがあらうがどうぢや」と「ハイ恐れ入り
 ましてございます」内「コレ三河屋萬藏、其方
 は別段に罪なし、只お上にお手敷を掛けたる
 廉を以て手鍵町内預け十日間申附けるから左
 様心得ろ」萬「へ、ッ恐れ入りございしま
 す」内「馬五郎」馬「へエ」内「其方は手鍵宿預



け二十日間申附ける」馬「へッ恐れ入りました」内「萬藏馬五郎の兩人立て立ちませえ」兩人「へエ」
 と云つて兩人はお腰掛け口から退りました、又品川本宿の鶴島屋金左衛門の家は缺所といふ事に
 相成りました、御奉行の鍋島内匠頭殿も實は吉松を助けたい、健次半次の一人も助けてやりたい、
 切めて遠島とか永牢とかいふ位にして置いてやりたいといふ思召し、併し旗本を切つて其屋敷へ火
 を放けました、夫れで岩田の家一軒焼たのなら未だしも、類焼をして其が爲に三人を怨んで居る
 者も多くあるから、此人達の事前助ける事が出来ない、殊に幕府盛んの頃ほひは火放けをした者
 は火烙りの刑と極つて居る位でございますから、お掛りがどう思つても仕方がない、據ろなく
 此の吉松、健次、半次、又立花金五郎の四人は打ち首の上獄門といふ事に相成りました、又金五
 郎の女房おさとは、傳馬町永牢仰せ附り、之でお調べが相濟み、一同傳馬町の御牢内へ下る事に
 なりました、爰で百日の間に何かお上のお目出度があれば、打首獄門の者は、遠島又は永牢にな
 り、遠島或は永牢の者は、出牢申附けるといふ事になるのだが、生憎と此の時お上に何のお目出
 度もなかつた、百日を一日も過す譯になりませんから、遂々千住小塚ヶ原に引出されまして打ち
 首の上獄門に相成りました、之で相濟んだのは未だお上にお情があつたからでございます、其の
 時の捨札に士農工商と書いてありました、武士が立花金五郎、農が間々田の健次、工が經師屋職
 人の祐天吉松、商は鞆吳服のお旦那半次、餘り珍らしいので此講談に士農工商といふ表題が附い
 て居ります、ソコで吉松の初めの女房加賀屋の娘おぬひは、生涯淺草仲店で美濃屋といふ小間物

屋をして終り、おぬひの歿後悴の七松が、武田伊賀守様のお屋敷へ奉公をして居りましたが、後に武田伊賀守様が天狗黨の巨魁になつて加賀篠原へ行た時にお供をして、遂に伊賀守様の爲に討死をいたしました、又三河屋萬藏は、吉松の二度目の女房おげんを己れの養女として、阿波様の部屋頭、櫓の吉五郎といふ人を養子に貫ひ、二代目三河屋萬藏と致し、おげんは内々吉松の後世の菩提を弔ひました、立花金五郎の女房おさとは、牢死を致しましたが、之も自業自得でございます、長らく御愛讀を蒙りました祐天吉松の傳記も、之にて大尾と致します。

長篇講談 祐天吉松 終



大正八年七月十二日印刷
大正八年七月十五日發行

不許複製

編者

今村次郎

發行者

株式會社博文館

右代表者 形橋俊長

大橋進一

印刷者

東京市小石川區久堅町百八番地
高橋季吉

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地
株式會社博文館印刷所

長篇講談 第四十五編

口祐天吉松

正價四十八錢

發行所

東京日本橋區本町

株式會社 博文館

振替東京二四〇番

家庭團樂の好讀物 一 講演者は當代の名人



長篇講談



- | | |
|----|---------|
| 1 | 木下藤吉郎 |
| 2 | 赤穂義士 |
| 3 | 笹野武槍男 |
| 4 | 伊達騷動 |
| 5 | 怪談社の丹夜燈 |
| 6 | 天賀一の長 |
| 7 | 佐村井長 |
| 8 | 文殊宗九 |
| 9 | 大久保彦左衛門 |
| 10 | 紀伊屋文左衛門 |
| 11 | 荒木又右衛門 |
| 12 | 藩隨院長兵衛 |
| 13 | 羽柴筑前守 |
| 14 | 相馬誠忠錄 |
| 15 | 復天下茶屋 |
| 16 | 加藤清正 |
| 17 | 水戸黃門漫遊記 |
| 18 | 石川五右衛門也 |
| 19 | 國定忠次 |
| 20 | 鹽原多助 |
| 21 | 豊臣秀吉 |
| 22 | 一休文禪 |
| 23 | 宮本一刀の譽 |
| 24 | 山中鹿之助 |
| 25 | 榛名の梅ヶ香 |
| 26 | 甲賀忍術の勇士 |
| 27 | 寛永三馬術 |
| 28 | 小金井小次郎 |
| 29 | 柳生旅日記 |
| 30 | 柳川庄八 |
| 31 | 關東七人男 |
| 32 | 糸平内 |
| 33 | 堀部安兵衛 |
| 34 | 鼠小僧次郎吉 |
| 35 | 塚原卜傳 |
| 36 | 太賀騷動 |
| 37 | 加賀騷動 |
| 38 | 雷電爲右衛門 |
| 39 | 田宮坊太郎 |
| 40 | 日蓮記 |
| 41 | 野晒勘三郎 |
| 42 | 三家三勇士 |
| 43 | 日本左衛門 |
| 44 | 旗本五人男 |
| 45 | 祐天吉松 |

町本館文博 株式會社 京東

四六列美裝五百餘頁
新鑄活字總振假名附
麗極彩色口繪二葉
精巧密畫八十個挿入
正價各四十八錢
送料各六錢

ここのぎは!

- | | |
|----|---------|
| 46 | 仙石騷動 |
| 47 | 音羽小瀧町 |
| 48 | 猿飛佐助 |
| 49 | 古市十人斬 |
| 50 | 徳川家康 |
| 46 | 四谷怪談 |
| 47 | お岩稲荷利生記 |
| 48 | 山本勘助 |
| 49 | 蒲生三勇士 |
| 50 | 毛谷村六助 |
| 51 | 赤穂義士銘々傳 |

：著 君 袋 花 山 田：

りぐめ泉温

(急遽十版)

三五判新形函入五百餘頁 正價壹圓廿錢 送料六錢

日本の温泉を描いてこれほど忠實に眼の前に見えるやうな本はこれが始めてです。それに温泉そのものばかりではない、温泉に行く途中の山や川や名勝や、さういふものまで詳しく親切に書いてあります、ことに著者一流のすぐれた文章の筆致は、讀者に藝術的氣分の横溢せるのを感じずには置かせないだらうと思ひます。温泉の静かな氣分に浸りながら、これを讀んでも興味は盡きないやうな本です。大方君子の御一讀を乞はすには居られません。……………

●●●●●●●●
株式會社

博文館發行

田山花袋君著 旅

(第九版)

正價壹圓五十錢

送料八錢

：著 新 生 先 月 桂 町 大：

りぐめ水山

三五判新形函入口繪豊富 正價壹圓二十錢 送料六錢

筆に健にして脚に健なる大町桂月先生、平生好んで山水を探り一たび遊ぶや苟くもせず、勞を厭はず險を避けず徹底的に勝を窮め幽を闡かずんば止まず到る處隠れたるは顯はれ山水爲めに光輝を發す、先生の如く、山水に忠實なるは其比を見ず加ふるに先生獨特の名文を以て雲烟筆端に涌き山容水態紙表に躍動す以て遊覽すべく以て臥遊に充つべし。

株式會社 博文館 東京本町

文學博士 大類伸君著

史蹟めぐり

六版

壹圓二十錢 送料六錢

子爵 田中阿歌磨著

湖沼めぐり

四版

壹圓二十錢 送料六錢



容易に手に
入れ難い珍
本奇著が僅
かのお金で
読まれる！

吾邦古來著作せられたる神史小説の類汗牛充棟も嘗ならず、妙趣奇想に富めるものも亦尠からず、然して現今讀書界の趨勢は、漸く新しきものに倦きて、徳川時代の古きを逐はんとするの傾向あり、神史小説は、こ

の要求を充さん爲に外ならず、集むる所は馬琴種彦京傳蘭山等が實録體小説、春水金水曲山人等が人情小説、一九三馬鯉丈等が滑稽小説中の傑出したるものを抜き一集中に二三種乃至十種を収む。淺膚なる現代小説にあき足らぬ人々に薦む。

四六判和裝美本
紙數各約四百五十頁
口繪二葉乃至十數葉
挿畫九十個乃至百卅個

正價各册
金四拾八錢

郵稅各六錢

はのる出にとあお

第十一集	第十集	第九集
花阿糸	明小笠	月閑飛
櫻波	幡松	情驛
春蝶	鳥怪峠	氷末匠
封の蝶	後異鬼	奇摘物
じ鳴奇	正雨神	縁花語
文門縁	夢沼討	近刊
同	續刊	

第五集	第六集	第七集	第八集
總優曇華	花身滑	修紫田	修紫田
偕物語	八山人	舍源氏	舍源氏
七版	嘘の川	(前卷)	(後卷)
	八藝	六版	六版

第五集	第六集	第七集	第八集
繪本三國妖婦傳	松浦佐用媛石魂錄	道成寺鐘魔記	久米平内剛力物語
十九版	十七版	高尾丸劍稻妻	復讐奇談ふた子山
	十七版	女船頭矢口渡場	譚染劇模
	十二版	柳糸花組交	八版

鐵道院運輸旅客課
谷口梨花君著

汽車の窓から

新形三六判函入
橋本邦助畫伯裝幀
口繪寫真版及木
版圖版數十個入

西南部 (東海・中央・北陸・關西) 紙數七百數十頁
山陽・山陰・四國・九州
東北部 (東北・信越・總武・磐城) 紙數六百五十頁
奥羽・陸羽・北海道各線

正價各册
壹圓五拾錢
送料各十錢

案内記は多し旅行記亦少からず、されど車窓よりの案内記は殆ど無し。旅行者は案内記を手にして而も車窓の景觀との連絡なきに失望する者多々なり、「汽車の窓から」は即ち其旅行者に取つて最必要の案内記にして、地理を説き歴史を語り、交通を説き産業を叙す、名所舊跡名山大河、説いて漏すことなし。車窓の景觀茲に於て始めて活く而も著者は旅行者の多くが必ず下車せらるべき都市名勝を案内するの注意を怠らず車窓の友たると共に、又遊覽の手引たるを期せり。

株式會社
博文館發行

779
984

21

終

